現代實用

支那語講座

乙

2/10

XI

年中行事篇

澤村幸夫編著

文求堂印行

始

特213
898

支那語講座

現代實用

XI

年中行事篇

澤村幸夫編著

文求堂印行

凡例

日附は總べて陰暦を用ゐた。陽暦を以てさせる特種な祭典、記念日などは、明かに陽暦とことわつておいた。陽暦を採用してゐるのは、狹い範圍に限られてゐるのと、陰陽二暦は年によりて一二日の差を生ずるからである。

兩廣山地に住んで夷家と總稱されるもの、南海に水上生活を營む蛋家、福建、浙江の山地に分布してゐる畲民、四川、貴州に多い猓玀などの、割合に外國人の眼につき易い非漢民族の中には、百萬を以て算せられるものもあるが、彼等の行事習俗は、總べて除外した。本部支那を通じて、最も廣く、最も遍く、且つ上下階級を問はずして行はるるものを選んだ。

行事風俗の起原、變遷、行はるる地方、行ふ人、その稱呼などは、できるだ

け簡明にしるし、普通の辭書には見當らない方言、俗字なども、また能ふだけ註解を施した。

國民政府の新生活運動このかた、殊に日支事變發生の後は、廢絶もしくは中止された儀式、記念日などもあるべきを慮り、本年三月までの支那新聞、畫報、雜誌によりて、手をつくして調べた上、卷末に附錄としておいた。

引用し、もしくは參考にあてた書名の主なるものだけを擧げておく。

顧祿・清嘉錄
潘榮陛・帝京歲時紀勝
張江裁・京津風土叢書
張亮采・中國風俗史

黃現璠・唐代社會概略
楊樹達・漢代婚喪禮俗考
尙秉和・歷代社會風俗事物考
瞿宣穎・中國社會史料叢鈔
胡韞玉・中華全國風俗志
吳研因・各省童謠集
如林・搜神大全
貝原好古・日本歲時記
廣州中山大學・民俗
Dyer Ball—Things Chinese.
Samuel Couling—The Encyclopaedia Sinica.

この一篇が、多くの粗漏と錯誤とを保有することも免れ得ないだら

うと恐縮してゐる。が、初めて支那語を學び、支那事情を研究せんとする人のために、終始、深切な參考書を作らうと心がけた。

昭和十六年三月三十一日

澤村幸夫

現代實用

支那語講座 第十一卷 年中行事篇目次

凡例 …… 一

一月 …… 一

一、元旦。—接神 供天地桌。 拜天地。 三跪九叩。
百分。 天地佛 蜜供。 全供。
五天人—八仙。 千張紙 接神呪。 拜四方。 四方神
家堂拜。—拜年 齋尊。 拜年 吃元寶
二、祖師。—祖師會。 各行各祖師。 妓女さへ 火祖は共。
通 恭慶祖師。
三、廻禮 前清の朝賀 飛帖

婦人廻禮　正月不空閨　細民遊玩

四、米娘娘生日　江南素食せず　祀關岳

五、財神祭—迎福　五路財神生日　五通神なるもの　劇盗か

五路財神正體　五通神說

楞迦山廟

玄壇神趙公明　趙子龍從弟說　封神演義

增福財神　增福相公　種々なる

財神　福祿神　福神

財神比干　關帝像　殷の三仁　大衆讀み本の影響

財神關帝　わが國の崇拜者　顯聖實例　財神たる

理由

六、破五　開市　燒利市　元寶魚　財神酒

年節

酒　忌門

七、人日　東方朔占書　田家五行　秤水　七種菜

薰火

八、穀日—順星日　上八日　看參星　星神馬兒

九、玉皇誕辰　齋天　徽號　三教搜神大全所傳

一〇、元宵—燈節　異稱　放夜　燈節變遷　西太后の

派手好　燈宴

畫燈　氷燈　麥芽燈　龍燈

高蹻—橋燈　秧歌　旱船　火塔　星橋

一一、三官誕辰　三官素　花三官　五斗米道流弊

素・蔬・齋

一二、娘奶神誕　所在に娘奶　夫人廟　夫人事蹟　顯聖

封號　請花
三、接坑三姑娘　靈魂百貨店
姑　九娘神　紫姑　請姑姑　瓢姑
百草靈　帚姑　針姑
馬頭娘　先蠶西陵氏　葦姑　青衣神　蠶姑
一四、走三橋　走百病　走橋
一五、塡倉　倉神　韓信倉神說　『倉王之神』　打囤
弔錢　鼠の嫁入　畫米囤
二月……六四
一、太陽生日　中和節遺風　太陽鷄糕　太陽錢糧
二、土地神生日　古への土示　敬稱
三、龍擡頭　引龍廻　薰蟲　掌腰糕

四、文昌帝君誕　斗魁戴匡六星　梓潼帝君　七曲神君
五、百花生日　無雨百果熟　賞紅　花神　崔元微故事
六、觀世音誕日　長明燈油寄進　歸依寄名　送子觀音
ブランド驚く　觀音素　天竺露宿
三月……七五
一、寒食　介之推故事
二、清明節　踏青　楊柳球　眼亮花　青糰紅藕
三、孫總理忌辰　植樹節
四、蠶月　養蠶地　皇后親蠶　織耕圖御製序　蠶忌
育蠶序程　熱棚・冷棚　蠶花五聖　蠶黨　繭山
米果

五、蠶業地生活　時令　寢食不遑　三忙
六、採茶　雨前・火前　四月少閑人　六安採茶歌
七、媽姐誕―天后生日　北の娘娘に當る　封號　天后
來歷
八、東嶽生日　五嶽の一　草鞋香

四月……九三

一、浴佛會　放生會　阿彌飯
二、娘娘廟會　祭期　娘娘の稱呼　趙公明の三女說
玉女說　玉葉說　三女神俗稱　王母娘娘
三、藥王誕辰　醫學　韋古道說　韋善俊說　扁鵲說
三皇廟
四、立夏　七家茶　立夏見三新　酒娘飯

五、勞動節―五一記念日

五月……一〇二

一、端午　惡月・毒月　善月　修善月齋　端午異稱
端五景　健人　長壽線　五毒　天師符　鍾馗
圖　五毒符　當代の張天師
二、競渡―龍舟　櫻子・競渡傳說　女嬰廟　伍子胥說
龍船　龍船市　燈划龍船　福州の扒龍船　廣海
の打龍船　童謠二
三、關帝生日　單刀會　磨刀雨

六月……一一五

一、天貺節　曬晾沐浴の日　狗醜浴　翻經會

二、荷花生日。　觀蓮節
三、雷尊誕—老郎神　雷齋
雷尊徽號　老郎神　封齋　開葷
老瞼會　壽龍戲

七月……一二〇

一、乞巧節—七夕　傳說由來　七星斗壇　鴛鴦水
磬巧　巧果笑靨兒　梳裝盆　喫星
二、盂蘭盆會　鬼月　七月半　起原　太平公醮
目蓮寶卷　目蓮の支那人化　燒幽
三、目蓮戲　神戲　舞臺面　聞太師　戲班
四、演戲愛好　驚くべき熱愛　堂客戲　酬神演戲
湯斌の指斥　平安戲　召喪

八月……一三四

一、竈君生日　竈君會　竈君素　江南農村の實例
小祭八度以上
二、中秋節　八月半　月光馬　月宮符像　白玉兎
斗香
月餅　製法　人月雙圓の意　月餅故事　齋月宮
走月亮　樹中秋
三、孔子誕辰—先師誕　清朝祭祀　國祭日指定　祀孔
禮制
四、地藏王生日　地藏は產の神　地藏燈　燒地香
狗尿香　張士誠記念說　陳友諒記念說

九月……一四七

一、斗母生誕　九皇會　小兒守護神

二、重陽　變遷　故事　重陽糕・花糕　重糕の起原
登高　菊花會　辭青
三、霜降日　信爆　軍神祭　看纛旗

十月……一五五

一、十月節—寒衣節　祀厲壇　送寒衣　收租完糧
寒衣
二、醃菜釀酒　春不老　十月白　冬儲

十一月……一六〇

一、冬至　長至・冬住　祀天　亞歲　消寒圖
冬至糰　安樂菜　九裏天　鬼祟俗信　冬至肉
服裘

二、救恤　煖廠・粥廠　棉衣會　善士
三、冬春米　彌陀佛生日　劉半農の新詩
四、佃戶納租　三限　趕限頭　安徽農歌

十二月……一七一

一、臘八　臘日　佛粥　製法　スミスの皮肉
二、臘八醋　南人用ゐず　除鬼防祟の意
三、祭竈　小過年　念四夜　灶君・灶奶奶　膠牙錫
竈神本體　竈神職分
醉司命
俞淨意話說　俞淨意身世　竈神訪問　祭竈　民
謠
四、亂歲日　亂絲日　吉日つづき

五、接玉皇　下降稽査　女人の毒舌警戒　國罵

六、信仰生活斷片　僧道無用　信心家たち　觀音へ願かけ　孔子像禮拜　半月も立腹つづけ

七、械鬪—打寃家　集團鬪爭　彈壓無効　潮州樂府

定期械鬪

八、歳末—除夜　守歳諸準備　拜官年　年禮　年菜

年畫　林語堂の小品　接香

洒掃—入浴　大掃除　地を掃かず・水を汲まず・火を乞はず　除穢氣

押歳錢　賞錢とは別物　カムシヨウ　年紙供張

門神—春聯　神茶・鬱壘　正座兒　秦瓊・敬德說

白臉兒・黑臉兒　春聯　起原　種類と稱呼　掛錢

桃符

掌門炭—年飯　驅儺　將軍炭　煨歳　節節高

附錄

一、童謠三種　過年(河北省北京)　二月半(江蘇省無錫)　正月正(江蘇省泰縣)　……二一三

二、二十四氣陰陽曆對照表(玉海に據る)

三、中華民國祝祭日・記念日

四、滿洲帝國國家祝祭日

現代實用

支那語講座 第十一巻 年中行事篇

澤村幸夫編著

一月

一、元旦(ユアヌタヌ)—接神(チエンシエヌ)

接神

除夜の更けて十二時を過ぎれば、午前一時ごろから、東の空があかるくなるころまでに、元日早朝の最も大切な儀式の接神(チエンシエヌ)が、緊張した氣分で行はれる。一家を保佑し幸福を授けられる神々が、年とともに新たに降られるのを迎へんとするのである。舊慣と格式とを重んずる中流以上の家ならば家ほど、たとへ中

流もしくは、その以下の貧しからざるほどの家ならば、南北支那おしなべて、家長を初めとして家内の老幼男女、召使の末にいたるまで、それぞれ禮裝して、庭さきに祀られた天地桌の前に集り、長幼の順位によつて、最敬禮である三跪九叩の禮を行ふ。

迎へられる神々を天地爺といふ。舊歳末の二十三日に上天した竈神、財神、關帝、姜太公その他である。この儀式を供天地桌とも、拜天地ともいふ。天地桌は、天地諸神を祭る壇の謂で、正しくは天圓地方の意により、桌の表圓く脚は四角なるを用うべきである。この形式による拜天地は、新婦の初めて男家の門に入り、喜轎を下り、夫婦の誓ひをなす際にも用ゐられる。

三跪九叩の禮は、對象たる神もしくは人の前に直立し、正しく注視し、さらに片膝をついて腰をささへ、兩手は體に沿うて下に

供天地桌
拜天地
三跪九叩

垂れた後、掌を地につけ、體を前に屈め、額の地を打つくらゐまでにするのが正しく、しかも、それを三度くりかへすのである。ただ、しかし保守的なる北支那を除き、洋風影響の中南支那では、この古い型の敬禮法も、すでに五十年前から廢れて、帽をぬいで前體をかがめる脫帽、鞠躬といふ簡單な型だけとなつてゐる(もつとも同じ鞠躬でも一樣でなく、兩手を組んで額の高さまであげてする揖といふ型もある)しかし、元旦の接神といふ如き際とか、義兄弟、養母養女の誓約などの場合は、南北を問はず、今日でも最も恭しい型の右の跪拜が行はれる。特にこの夜は、一家を擧げて虔み畏みてせねばならぬで、女子供まで、必ず喚び集め、頭數を揃へた後にする。そして、それに先つて、いかに貧しく、その日のたつきに逐ひ立てられてゐる家でも、必ず新しい神々の像を

貼り、供物をし、香と燭とを點ずるだけのことはするのである。一家一年の吉凶禍福が直接に關はる儀式と信ぜられてゐるからだ。

百分

神像は一位の神を一枚に印刷したのを百枚重ね、その神像の上半身だけが見え、下半身は紅紙で蓋ひて一束としたもので、これを百分と名ける。もつとも、百分とは名けるが、これを省略して二三十枚としたるがあり、最も簡單なのは、天地佛と老佛とも。

天地佛

いつて、一枚の紙に玉皇、紫微、后天、后土、財神などのいろんな神佛の群像を、横列に五段くらゐに分つて畫き、粗雑な彩色を加へたのもある。それすら買はないか、もしくは買へないものは、幅二三寸、高さ二尺くらゐの紅紙に『天地三界之神位』と書いただけのものを、百分に代へてゐる。かやうな例は他にもある。

蜜供

かの中秋拜月の夜の對象とする畫像などには、一枚の紙を三段にくぎり、杵をもてる兎兒爺を中心にした廣寒宮と、一段に關帝を、一段に送子觀音を描いたもの一枚で、一切の神佛を代表せしめてゐる。

百分の前には蜜供とて、麥粉で作つた幅五分、長さ一寸くらゐの長方形の菓子を、低きは一尺、高きは五尺まで、寶塔みたいに積み重ねて供へる。儀式を尊びて念を入れる家では、これを一位の神に二盛りづつ供へる。これをやや簡素にする向でも、麥粉で作つた徑三寸ほどのわが國の餅やうのものを、二三尺も積み重ねて、その間ごとに棗の實を挾み、餅の各層の所々には、五天人の畫像の切りぬいたものを立てる。さらに蜜供の前方には、林檎、柑橘、石榴、乾菜、鮮菜、饅頭、餃子、年糕の類を、にぎやかに横列

全供

に陳べて供へ、これを全供と稱へる。五天人の外に、一種の燈心草で、もしくは紙で作つた八仙の像を立てるもある。

五天人
八仙

五天人——八仙

五天人とは、天官賜福、招財童子、利市仙官、報喜三元、福壽の意を人間に徴象したので、長壽、富貴、無病、尊德、天命を五福とするのと同じ意義である。八仙といふは、道教の祖神の一人たる呂洞賓（純陽）を中心に、漢鍾離（單に鍾離とも、王陽子）張果老（果隱とも、張仙）韓湘（子を附して韓湘子とも）鐵拐李（李公、鐵拐先生とも）、曹國舅、藍采和、何仙姑の八位で、何仙姑のみが女性である。（これに、なほ一位の壽星老を加へるのを普通とする）ただ、八仙いづれも多少の事蹟を有するものではあるが、しか

も何故に擇ばれて民衆の敬愛を博するに至れるかは疑問である。一説には、元代以前にはこのことがない。多分元曲の『八仙慶壽』に基くのだらうと。

千張紙
接神咒

恭しく三跪九叩の禮を終つた後、引續いて、黃色の紙に錢の型をおき、もしくは、打ちぬいた黃錢、馬蹄銀の元寶、阡張（千張紙とも）とて紙を縱に條としたものや、接神咒（表とも、疏とも）とて黃色紙に降臨する神佛を迎接する表文で、年末に寺廟から配供してくれたものか、自身で起草したものを焚く。接神咒だけは、同じく燒くにも、水盤に燒酒を盛つたのに立て、上部から火を點じ、燃へて行く火の勢と音とをめでたがる。これを焚表といふ。

焚表

拜四方

次に四方を拜する。それまでに、大門の外で、俗に二提脚と名ける一度爆音を發して飛び上つた後、また空ではぢけて二度爆音を發する仕掛けの爆竹を放ち、さらに點火した線香の渦まき上るのを手に捧げて迎へた神々を屋内に案内する意味の形式をとる。これは、接神の禮を庭さきで行うた時のことで、庭なき市街地の狹い商家か、その朝の天候が宜しくないやうな時には、庭ある家においても、儀式は屋内で行ふ。黄紙、千張紙、接神呪などを燒くのも延期することがある。

拜四方

四方の神と申すは、喜貴・福財の四柱で、その年の時憲書すなはち暦によつて、拜すべき神の在す方位に向ひ、香を焚き、爆竹を鳴らし、畏みて祈り且つ拜むのである。四神の中でも、喜神は殊に重要視され、他の三神を省略することあつても、喜神だけは必

四方神

ず元旦に拜すべく、春に魁けて咲く梅の花に徵象せられる吉神といはれる。貴神は、干支の天乙貴人の方位に、福神は、命宮を逆推して第十宮にいたるところの神らしく、財神は、普通にいふところの財神ではなくして、星相家の財帛宮であるらしいとの說がある。いづれにしても、支那民衆には、單なる古來の舊慣であり、緣起を祝ふための一行事たるに過ぎない。彼等の間には、新年に門外へ出る際には、必ず一度は喜神方へ足をむけた後に、それから他の方向に轉ずるものもある。これは、わが國に傳へられた陰陽道と同根で、歲德の惠方と稱するのと同義らしい。

家堂拜—拜年

それがすむと、家堂に進んで、あらかじめ懸けつらねておいた

祖先の畫像を跪拜して、その靈を迎へる。家堂とはいふが、邸内に家廟、祠堂を有するものばかりではなく、むしろそれは少いのであるから、多くは戸内の廣間を以てし、多くの一代に名を成せる祖先を有する者は、從つて多くの畫像を、中央から兩側の壁に懸け列ねる。今日は寫眞があるので、大きく引伸したのを額に納めて、場處を節約することもできるが、昔のものは特に描かした畫像である。從つて處狹くそれ等の畫像で埋められる。畫像の前には、卓を配し、卓の上には香燭と供物とが程よく按排されてゐる。禮裝の家長は、同居せる一家の血姻族を率ひて、恭しく跪いて禮拜する。家に廣間がなく、畫像となされた祖先とてもないものは、亡くなつた兩親の雙幅くらゐを床の正面に懸け、香花と供物とをささげるに止める。中南支那も、幾代かを

一地方に定住して、大家とか舊家とか稱せられるものは除外例として、開港地などの近代都市に住むものは、中産の家でも、多くの畫像を懸けたのはあまりなく、ただ、香燭、茶果、年糕などの卓上の供物を省略することがないだけである。畫像を懸けることを懸影といひ、通例は三日にして取り收めるが、家によりては、五日、十日、あるひは上元の夜にいたり、また祭をなした後に仕舞ひこむ。それを落影といひ、江蘇あたりでは、その期間を齋尊といふ。それまでの間に、親戚の年賀に來るのがあれば、互に畫像を拜せしめる。

次に、もしくは家堂を拜する前に、家長は臺所に廻つて、竈神(灶王、後に見ゆ)を拜する。これで元旦の儀式は畢つたことになるので、一家内のもの、まづ家長に向つて叩拜した後、兄弟姉妹

吃元寶

姉娌(兄弟の妻)、長幼の序によりて新年の挨拶をのべる。これを拜年といふ。畢れば、一同、昨年の暮から、今日のために準備された念入りの馳走の食卓につく。一年最初の食事であるから、吉利の意を取りて、北方では吃元寶といひ、なるべく多食を佳とするとある。これから正月の樂みは始るので、滿腹したもので、衣をくつろげて暫時假寢するがあり、あるひは、青年の男婦子女、おのおの近づく所を擇んで相聚りて、嬉戯し、紙牌、骨牌を鬪はすがあり、戯曲を唱ふがあり、樂器を弄するがある。また、夜が明くるを待つて回禮に出かけるのもある。

二、祖師會

元旦の諸儀式の間に、學者、教師、官吏は孔子像を、しからざるもの

祖師

のは家業の神たる祖師を祭るものがある。官吏、學者などの家ではしないが、職人の家では、かねて小さくとも神厨にその畫像をおさめて禮拜を怠らないのがある。かかる家では、元旦は家堂に祖先を祭るに前後して、型の如く香燭を點じ、虔んでこれに額づき禱る。祖師は職體によつておのおの違つてゐる。たとへば、農家と醫師とは神農氏、炎帝を、裁縫を業とするものは軒轅氏、黄帝を、印刷、印刻、書籍業者は文昌帝君(梓潼帝君)を、石工、木工、煉瓦工は魯班(一に般)すなはち公輸子を、酒造りの杜氏は杜康眞人を、俳優や芝居人等は唐明皇すなはち玄宗を拜するのである。

各行各祖師

この外、俗に三百六十行といはれる各種各樣の手藝工人は、おのおの祖師をもたぬはなく、祖師を家々に、もしくは、その組合事務所に祀らざるものはない。北方の妓女には白眉神といふがあ

妓女さへ

祖師會

り、南方の男妓には胡田寶といふ祖師があるといふから驚く外はない。が、その多くは眞人といひ、仙翁、仙女といふも、いい可減に道士等が勿體をつけた假託の超人で、畫像、塑像を見ても、その本質を稽へ得るものは少い。

ついでながら、ここに記しておきたいことは、北京における各職人の同業組合は、理髮人組合の七月中旬においてするものを除いて、大抵は、寒からず暑からざる三四月の間に、おのおの祖師會を辨理することである。彼等の總會で各種の規約の改正、役員選擧などを行ひ、又、戲を演じて神に酬うる例である。油、酒などの同業組合にいたつては、組合員が職人ばかりでなく、相當な資財を擁するものをも含むから、これ等の組合においては、いはゆる善擧(慈惠救濟事業)に關しても各家の醵金を議定したりも

恭慶祖師

することがある。もつとも、同業組合の中には、右の祖師がないのもある。それは火祖を祀るのが常例である。火祖は祝融と、陶唐氏の火正で商丘に居れりと左傳に見えた閼伯とであるといはれてゐる。彼等にとりては、それは誰であつても可い。同じことである。恭慶祖師は迷信に近いとはいへ、承平時代には無くてならないものと『都市叢談』といふのに見える。

三、廻禮

前清の朝賀

廻禮は民國に入つてから、次第に簡略となつた。前清時代には、天子、百官の朝賀を受けられたので、それを濟ました官吏たちは、位階服のまま、輿を廻へして外舅姑即ち妻の父母の家へは必ず年賀に出かけたもので、地方の省城でも、官吏には遙拜式があ

つた。今日とても保守的な北方には、幾分この遺習も見られるが、中南の商業地では、さやうな几帳面なことはない。大體、元日の回禮は、未明もしくは早朝を可しとし、午後は甚だ好ましからず、殊に日が暮れてから行くのは禮にかなはないとされてゐるから、元旦には、朝の間に父の親戚を拜訪(パイファン)するくらゐで、五日までに、母の家、妻の里、それから親しい友人、取引先と、隨時に出かけるのが普通で、それすら略し、童僕をして主人に代つて名刺をくばらせて、賀意を表するものが多くなつた。これを江南では飛帖(フェイティエ)といふ。蓋し支那の元旦は、飽くまで家庭的のもの、すなはち家中心で、社會的のものではないのである。所々に爆竹(パオチウ)の聲が聞へたり、舖の內では鑼を叩いて騷いでゐ、また、蓄音器をかけて肉聲のこれに和してゐるのを聽いたりすることもあるが、街面の

大戸はとざしてゐ、處としては吉例の初市を開く寺廟とか、劇場とかはあつても、除夜とは打つて變つて、大體は極めて靜かである。

婦人廻禮(フレンホイリ)

南北共通の觀念の上からいへば、女は五日を過ぎねば外に出ず、廻禮もそれまでは遠慮するものとなつてゐる。寡婦と妊婦とは自家においても室に籠つて、外來客を迎へる應接室などへは姿を見せない。北方における極端な家庭の例としては、接神(チエシエン)の朝は、婦女の身體には穢があつて神を瀆し、その咎を獲る恐れがある。また一說には、女人は終年勞苦して日々男子に事へるから、元旦だけは坐して休息せしむべきであるとて、炊事萬端を

男手のみで辨ずるものがある。南方では、元旦はもとより、五日までの間は、女の廻禮者は多くないが、さりとて嚴に禁忌するのではないらしい。蘇州あたりでは、婦女正月不空閨の諺があり、吉日を擇んで里方に年賀に行つても、たしなみ深い女は、必ず夕刻には歸るものともされてゐるが、杭州では、元旦、士大夫こもごも相賀し、細民の男女、また鮮衣往來して拜節し、琳宮梵宇に遊玩し、竟日絶ゑずと、宋代にこの地の風俗をかいたものに見える。

正月空閨せず

細民遊玩

それは細民の男女とことはつてはあるが、同じ江南地方でもまちまちであると解した方がよい。なほ、貴州では、元旦とは限らないが、總じて女の手は穢れたものとして厭惡し、神聖な行事などには一切關與させないといふことだ。

四、米娘娘生日。

一月二日。南京あたりでは、米娘娘生日といつて必ず米飯をたく。米娘には意味はないらしい。八月二十四日に別に稻生日といふもある。この日、雨ふれば藁腐るとて農家は、一日の天候を氣にする。それと米娘娘生日とは、何の關係もなささうであるから、多分、蕎菜花生日、荷花生日といふ類であらう。北方の守舊家は、元日は饅頭、二日は餃子、三日は餛飩、四日は麵と、五日までは米飯を用ゐず、さうでないまでも、米の粉、麥の粉を主材とした食品をとる習ひであるから、諺にいふ百里俗を同じくせずの例として擧げる。從つて隔年飯とて、大晦日に準備されて、正月の三日まで持ち越して食ふやうなことは、江南の都市では

江南素食せず

まづない。葷腥を避けて菜食するとも限つてゐない。殊勝げに二日までは精進料理ですました男も、三日には破る。女としても、一種の信仰を有するものの外は、男と同じである。盛んにホテル、レストランに行くのすらある。

五、財神祭——迎福

迎福
五路財神生日

北においては、この日、財神(主に増福財神)を迎へて祭る日である。南方では、五日とし、俗に五路財神生日となし、各商家は、前日の夜、もしくはこの日の清晨に起き出で、祭を畢つてから初めて店を開く。北京では、關帝廟だけは、元旦のまだ暗い中から、開廟して參詣者で賑ふところもあるが、關帝を主要な一位としての財神祭、それも商家においては、二日を以つて一年の財神祭第一

祀關岳

日とし、迎福の日とする。關帝を武神として岳飛と合せて祀る公的祝祭日は、また別であり、春秋の二季にて執り行はれる。

祭られる財神は、財神たることは同じでも、祭る人の業體を異にするに從つて異り、必ずしも一定してはゐない。その中には、歴史と傳説とから來た神があり、傳説も佛教からと道教からとの區別があり、全然意味をなしてゐない低級極る俗信から出たのもある。その中で、類別は幾様ともなし得るであらうが、最も廣く信仰されてゐるのは、關羽と比干の史的人物と、増福財神および玄壇神を主にし、さらに四位を加へた五路財神。まづ五路財神から語らう。

五路財神正體

五路財神

五路財神の神體についても、異說は少くない。あるひは、東・西・南・北・中の五路だと、輕くかたづける人もある。あるひは、姓を何、名を五路といつて、倭寇を禦いで功を立て、そのために陣歿した勇士とする人もある。あるひは、明代に蘇州あたりで盛んに祀られた淫神五通である。すなはち五郎神とも、五顯靈公とも、五聖ともいふのが是れだとする人もある。いづれも一氣に抹殺し去るべき說ではない。今も江南に遺つてゐる俗說を知るならば、容易に武斷すべきではない。けれども、同時に、かの夥しい支那民衆の間における稗史、小說、戲曲などの影響が、如何に甚大であり、底の底まで滲みこんでゐるかにつき、その他の例をとつ

て考へると、『封神演義』に基づくところの、玄壇神中心の四神とする通說が、最も無理のないところだらうとの氣もする。

五通神なるもの

五通神

五通神に關しては、『聊齋志異』などにも見えてゐる。蘇州を舞臺とし、深夜、良家の閨房に現はれ、一度見込んだら最後、遂には淫殺せずにはおかないといふ魔物である。ある家、たまりかねて一勇士に依賴し、彼等が忍び入つた時、不意に現はれ、刀で斬りつけ、箭を放つて射落したが、退治た後に見ると、驢の如き二小馬と二豚とであり、手負ひて水中に遁げこんだのは、手のやうな足の爪をもつた魔物であつたとある。さやうな魔物が、まして神がゐるはづはない。多分、神通力を有するとまで思はれるほ

劇盗か

どの五劇盗の婦女ばかりを襲ふものであつたらう。それが、清明代にいたると、いつの間にか、尾鰭がついて神らしいものとなり、蘇州の城西の楞枷山に大廟を設けられ、この廟は、康熙年間、巡撫湯斌によつて破毀されるまで、無知の郷民の香火を享けてゐたのである。

楞枷山廟

玄壇神趙公明

玄壇神趙公明・

玄壇神は趙公明といふ。比干も彼もともに殷代の人で、理財に長け、最も公明な人物であつたといはれ、ある俗書には、鍾南山人、秦の時、山中に世を避けて修道す、玉皇に召されて神雷副師となるなどとある。が、『封神演義』によると、彼は峨嵋山の道仙で、姜子牙（呂尚すなはち太公望）が周の武王を佐けて悪虐な紂

王を伐つ時、彼はかへつて紂王のために戰つた。また、五夷山の道士蕭昇と曹寶とは、武王に味方した。いづれも道術に長けたものの、智力を竭した戰爭であつたが、趙公明は姜子牙の道術のために終に斃れた。戰後、子牙は敵ながら天晴れであつた彼に敬服し、元始天尊に玉符金冊を請ひうけて、陣亡者の英靈を慰め、且つ神に封ずる際、彼を封じて金龍如意正一龍虎玄壇眞君とし、同時に、蕭昇を招寶天尊、曹寶を納珍天尊、喬有明を招財使者、姚邇盍を利市仙官とし、この四神を率ゐて、永く迎福驅邪の任にあたらしめることにしたと。但し、蘇州で元壇神といふは、三國の蜀の趙子龍の從兄弟との異説があり、三月十五日を祭日とする。玄を元にも作るは、清の聖祖の名を諱んでである。

趙子龍從弟説

封神演義

『封神演義』は、明の隆慶萬歴のころ、匿名の一名家が、水滸傳、西

遊記と鼎立する意圖の下に創作したものといはれる。二書に比べては甚だ遜色もあるが、武王の紂王を伐つ記事を興味中心に叙述し、その間に神・仙・佛魔・人間を配合して躍動せしめてゐるところ、これも亦た神怪小説の代表的なるものの一といへる。そして支那民衆をして、非科學的に愚にした點は、大いに非難さるべきであるが、支那古來の神話、傳説、迷信などを研究するためには、外國人にとりて、何としてもなくてならぬ奇書の一でもある。

增福財神—邪財神

増福財神

北京でいふ財神は、多くの場合、增福財神を意味する。五路財神を祀つた財神廟は甚だ少く、たまたま民家で祀つてゐるのも、

南方とはちがひ、まづ道樂稼業と見てよいといふことである。しかも、北京の增福財神は、關帝とともに正財神すなはち淨財を司る神とはせられてゐるが、その正體にはつきりしない點がある。比干を以て增福財神もしくは福祿神とするものもあつて、家内に祀れる財神壇の兩側の聯に、昔日商朝爲宰・今作人間福祿神とか、興家立業財源主・治國安邦福祿神とか題したのがある。この場合の福祿神は必ずしもある者に特定された固有名詞とばかり解せられぬが、比干と關帝とを一枚に書いたものに題して、漢封侯清封協天大帝・商封相周封增福財神とあるのは、確かに比干に相違ない。が、それかと思ふと、『搜神大全』にその繡像まで附せられてゐるのを見ると、增福相公、姓は李、諱は詭祖といふ。魏の文帝の朝に仕へ、白日は陽門の事を、夜は陰

増福相公

府の事を管した。後唐の明宗の天成元年に神と祀られ、増福相公と稱せられたとある。又、單に福神と稱せられるのが、同じ書に見える。判讀するにも苦しむほどの蕪雜な記載ではあるが、福神の姓は楊、諱は成といひ、唐の道州に刺史として在任中、朝廷で州の矮民を徵して宮奴とする例があつた。奸人がゐて名をこれに藉り、年ごとに必要以上の多數の人の子を貢させたので、民の父母の歎きがひどかつた。これを知つた楊刺史は、州に矮民あり、矮奴無しと奏聞した。天子はこれによつて感悟され、民の子を取ることを止められた。初め地方人がその德に感じて、祠を立て像を繪いて供養するだけであつたが、後には天下の士庶黎民みな像を繪いて敬ひ、福神とすることになつたと。今日、北地で廣くいふところの增福財神は果してどれか。疑はしい。

北支那でも、中南支那でも、以上の增福財神の外に、賜福、招財進寶、財寶など、財神もしくは福神の頭にいろいろの名を冠した金もうけの神が、決して五六の少數にとどまらない。財寶福神は一に金危危財神といひ、財寶福神は一に意外財帛財神といふなど、その異稱もまたその神の數に相當する。ただ、大多數の畫像だけは粗末な點で甲乙がなく、從つて畫像の特異點によつて財神、福神の正體を識別することも困難である。また、それ等の財神、福神の外に、鼬、刺蝟、狐、蛇、土鼠などの動物に神格を附與して、いろいろな神名を以て呼び、同じく財神として祀つてゐるものもある。これを祀るのは、農夫にあらざれば、主として掏摸、巾着切の徒で、その畫像の中には、動物本來の面相に、人間らしく衣冠束帶さしたのがある。

財神比干

支那本部と、邊疆と、南洋あたりの出稼地とを問はず、支那人の在るところ、必ず祀られてゐ、最も廣く上下階級に信仰されてゐるのは關帝である。關帝と比干とを、一厨、一龕におさめて神壇に安置してゐるものは、關帝を武財神とし、比干を文財神としてゐ、一枚に二神の像を左右に、中央に聚寶盆でも畫いたものは、文財神と題してある。關帝ばかりを畫いたのは、片手に長髯を撫し、片手に春秋を披見してゐ、その背後に、彼の子で父と共に難に死せる平が、兩手に漢壽亭侯の印綬を捧げてゐ、彼の忠實な從士で、主の訃を聞くとともに憤死した周倉が、大きな青龍刀を奉持してゐる。さもなくて、關帝單獨の畫像は、青龍刀を提げて赤

關帝像

兎馬に騎乘せるところ。比干の方は、この點でも寂寥であり、いはゆる人氣の點でも、やや關帝に遜る。

比干

殷の三仁

比干は、殷の紂王の至親で、また正義忠直なる人臣でもあつた。孔子も、『殷に三仁あり、微子は去り、箕子は奴となり、比干は諫めて死す』といはれてゐるほどであるから、この人物を關帝に配することは、決して倫を失してゐるのではない。けれども、彼をして今日ほどの大衆の尊信を博せしめたのは、紂王と妲妃の妲妃とがなせる淫虐無道が、例の『封神演義』や、『通俗列國志』などの大衆向の讀み本の類に、筆を極めて敷衍强調せられてゐることが、民衆の腦裏には、むしろその主となつてゐる。聖人の心には七竅ありと聞く、試みに比干が心を剖いて見給はんは如何と、妲妃が紂王を煽動し、比干ついに心を剜られた後も、姜太公の

大衆讀み本の影響

授けた呪符の力により、馬に騎して午門を退出するが、一たび街上に、無心菜といふをふれ賣りせる農婦に遇つて、たちまち落命するなど、面白きが上に面白くした小説の趣構は、荒誕とはいへ、女子供に印象を與へることが却つて深いのである。

財神關帝

關帝は更めていふまでもなく、三國の蜀漢の關羽、字は雲長である。劉先主、張翼德と義を桃園に結んだ後、男らしくて情誼に厚い多くの美點を發揮したことは、まことに人をして感佩せしめるものがあつた。彼を典型的な節義の士となすものは、獨り支那人ばかりでなく、わが國にも、特に畫像を唐土にもとめて洛東に奉祀した足利尊氏の如きがあり、その後裔までも優待し

我國の崇拜者

た水戸光圀の如きがある。で、支那人が關帝、關老爺と尊崇し、宋には崇惠公に封じ、やがて再び武安王を加へ、明に協天護國忠義大帝に封じ、清に本傳の壯繆を改めて忠義とし、民國三年に岳飛と共に武廟に合祀したのも、別に異とするに當らない。しかも、かやうに、年代が下るに從つて、民間の彼に對する敬意が加重したのは、彼の死の直後、荆州玉泉山の老僧普靜が前に靈を顯はしたといふ話説以來、一時代ごとに、地の南北を問はず、家國の危急を救ふべく、靈威を民衆に示したとの實例なるものが、必ず口口に語り傳へられたことと、『三國演義』の影響が、次第に發展したことにあるだらう。『五雜俎』には、實際見聞した關帝顯聖の例四件を擧げてゐ、また清代には世祖の北征の際、つねに濛々たる沙塵中に、かの特色ある神像そのままの姿を現はした。た

顯聖實例

だ、乘馬だけは白馬であつたとの頗る苦るしい神話まで流布されてゐる。これは、明の世祖すなはち永樂帝の北征の際に、つねに關帝の聖が現はれて前驅したといふ俗說の燒き直しでもあらうか(後に見ゆ)蓋し彼は武の神、正義の神、解急緩難の民族神とまで、時代を逐ふて祭り上げられたのである。商家が特に崇めて財神とするのは、店員の結束、取引仲間の約諾を彼にあやからんとするので、青龍刀から金を生んでくれといふ意ではない。

財神たる理由

六、破五

破五

正月五日を破五の日といふ。作爲するところあらんとする者も、必ずこの日を過ぎてからする。

江南の商家は、この日を財神すなはち路頭神の誕辰とし、前夜

もしくは今朝早くに、香燭を焚いて、敬虔に神を迎へ、且つ牲醴を具へ、爆竹を打ち鳴らし、それが濟んでから正式に初商賣を始める。これを開市とも、燒利市ともいふ。上海の商家では、この日の供物にかぎりて鮮鯉を用ゐ、これを元寶魚といふ。暮れ方から各家とも盛んに飲み始める。これを財神酒といふ。これより以後、連日、親戚知友を招待して、年酒の宴席を開く。この風俗も、日支事變を轉機として必ず變遷してはゐるだらうが、上海一地とはいはず蘇州には年節酒と稱して、元日から十五日まで、親戚朋友相往來して酒食する習俗があり、殊に城內よりは鄉村に盛んであつたことを思へば、跡形もなくなるまで一時に消え失せることもなからう。年節酒はすなはち古への傳坐酒にあたるもので、形式こそ變つてをれ、その由來するところは千年前に

開市
燒利市
元寶魚
財神酒
年節酒

忌門

ある。

清朝の盛時、すべての慣例が重く視られた時代においては、女に破五の意義があつたのであらう。『天尼偶聞』にも、以前五日、婦女往來を禁ずとある。南方の家庭でも、嚴に禁ぜざるまでも、女は自ら嗜むものとして、五日間は忌門の語に、多少の權威を感じてゐたが、近年は洋風に染むもの多ければ多いほど、破五の存在を知るものが少くなり、わづかに鄉村にのみ遺つてゐて、五日を過ぎると、盛裝した女子供の姿を見ることが、一時に多くなる。窮屈な思ひに一年を過して來た若嫁も、大つぴらに、懷かしい里歸りができる(北では六日に)。また舊年末に、繪像だとか、呪符だとか、松柏の枝とかをもつて來て、しばらく檀家に姿を見せなかつた。女道。尼姑。のやからも、この日以後、再び檀家へ年賀に來る。

七、人日。

七日を人日とする。そして八日は穀日、九日は天日、十日は地日と稱し、この四日間の陰晴を視て、一年の災祥を占ふの俗がある。漢の東方朔の占書の、歲後の八日、一日は鷄、二日は犬、三日は豕、四日は羊、五日は牛、六日は馬、七日は人、八日は穀に割りあて、その日晴るれば、主るところの物育ち、陰れば災ひがあるとあるのに基き、後人さらに九天十地を附會したものと說かれてゐる。

東方朔占書

田家五行

江蘇の鄉村に行はれて、今も權威を認められてゐる『田家五行』の如きは、元旦の淸晨に風雲を看て、その年の豐凶を占ひ、雲靑ければ蟲害、白ければ戰亂、赤ければ旱魃、黑ければ水災、黃なれば豐作となすのを初めとして、元日から十二日まで、瓶に水を盛つて

秤水

その輕重を秤り、一年十二ケ月の降雨の多寡を卜することを訓へてゐる。この七人八穀の占法もまた現に行はれてゐるものの一。現代人にとりて、いづれも迷信として一蹴に附せらるべき占卜ではあるが、宗懍の『荆楚歳時記』などにも、七日を人日とし、七種の菜で羹を作り、色ある帛、もしくは薄金を切りぬいて人とし、屏風に貼り、髪に戴き、それを贈答もしたこと、および、この日、高處に登つて詩を賦することが、特に擧げられてゐる。これで見れば、すでに晉の代には、この人日の俗があつたのであらう。

七種菜

北方では、菜に和して春餅を吃ひ、又、餅を煎りてわざわざ庭中で食ひ、これを薫火といふ。

薫火

八穀日。—順星日。

上八日看參星

八日は卽ち穀日上八日ともいふ。南方では、この夕、參星を看て、その年の水旱を占ふことをする。諺に、參星參在月背上・鯉魚跳在鍬蓋上・參星參在月口裏・種田種在石臼裏といふがそれである。又、この日雨れば、十五日の元宵もまた雨とする。參星は卽ちオリオンで、二十八星宿の一。支那は、これが東方に見ゆる時期を以て冬至の目印とし、西暦六百年前ごろには、暦法の大體を完成する程度に達したといはれる。しかも、星辰の運行の實際から離脱して、それを抽象した五行や十二支に拘泥し、さらに人事の現象と結びつけることによつて、西洋科學ほどの發達を見ず、農業もまた進歩せず、單なる迷信にまで墜落したのである。

順星日

この日を、また、順星日とも名け、初更、祭壇を設け、米の粉團子の

星神馬兒

餡入りを供へ、香を焚き、布もしくは紙張の燈籠の燈花といふを中庭に飾り、その後で、星の神々を畫いた星神馬兒をもち出し、松柏枝を芝麻稈の上におきて一緒に燒く儀式を行ふものもある。北においては殊に盛んである。これは、今もわが國に形式を存してゐる星供(くと發音する)、すなはち人の生年月に相當する本命星、又は當年の宿命星を祭り豫め災難を除くためにするのと、蓋し同根に出づる。馬兒の馬は碼にも、禡にも作る。

九、玉皇誕辰

玉皇誕辰
齋天

九日は、玉皇の誕辰である。道家は天日とも、天誕とも稱し、道觀には特に閣を架し醮を設けて祀る。江南では、これを齋天といふ。道場に赴いて燒香せざるものも、家庭においては素食し

徽號

て身を慎む。福州あたりでも同樣である。玉皇は卽ち道教の至高神で、玉皇の呼稱の固定しかけたのは、唐代あたりからであらうと、支那宗教論の權威ジェムス・レックスはいつてゐる。彼もまたいつてゐる如く、この名稱が公けに認められたのは宋代からで、眞宗の大中祥符七年に、初めて號を賜ひ、初めは玉皇大天帝。とのみいひ、天禧元年再び徽號を加へて、太上開天執符御歷含眞體道昊天至尊・玉皇大天帝といつた。道教至高神としての彼の名が、南北を通じて動かざるものとなり、且つ教勢擴張の上に役立つたのは、蓋しこの時からである。玉皇に關する神話類似のものは、數へきれぬほどだが、その一を例の『三教搜神大全』から擇び、玉皇上帝の項を抄譯する。

『上世に光嚴妙樂國といふがあり、國王を淨德。皇后を寶月光

華といつた。後を嗣ぐべき太子がなかつた。王はいたくこれを案じて、道衆に詔を下し、宮殿には旛蓋を懸け、供養祈禱すること半年であつた。と、ある夜、寶月光華皇后の夢に、太上老君が一嬰兒を抱いて龍輿に駕し、百色の幢蓋に前導されて浮び來ると見た。皇后は歡喜極つて、老君を跪拜し、社稷のために、膝の上なるその子を賜はれと哀懇した。皇后の切なる請ひが容されて、望みの如く嬰兒をその手に收めたと思ふと、夢はたちまち覺めて孕んでゐた。懷姙一年、丙午の歳正月九日午の刻に、後宮において玉の如き男兒を產んだ。これが玉皇大帝である。幼にして敏慧で、且つ慈心が深かつた。庫藏の財寶を取り出しては施行した。そして父王の崩御の後は、國政を大臣に附して位を遜り、自らは山に入つて修業し、八百刼を何回か重ねて、衆生を救ひ

もし、道をも宣揚したが、そのために、終に身命を殞した。』

10、元宵（ユアヌシャオ）——燈節（トンチエ）

元宵（ユアヌシャオ）は、上元（シアンユアヌ）、元夕（ユアヌシ）、元夜（ユアヌイエ）、十五夜（シウイエ）など幾樣もの異稱がある。端午（トウヌウ）、中秋（ヂウンちウ）の二節を加へて、最も重要な節日である。燈節（トンチエ）ともいふのは、この夜、戶ごとに燈籠をつるし、人は燈籠を提げ、燈火を以てすべての遊興の重點とするからである。一年初めての十五夜、すなはち滿月の夜が、その名の示すが如く、この令節の中心ではあるが、祭の騷ぎは前後五日にわたる。漢代に太乙（たイインエヌ）神を祀つたのが濫觴で、その夜は勅許により、放夜（ファンイエ）と稱して、ただ一晩だけ夜行の禁を弛めたと漢志に見える。が、その時代に、上巳、伏日、臘日、春社、秋社、夏至、冬至の八令節は、すでに社會的に遊宴飲樂の

燈節變遷

時となつてゐたのだから、元宵を祝する民俗は、蓋しその以前からあつたのであらう。唐に至りては、前夜の十四、十六の二夜もまた燈火をかかげることとなり、宋にはさらに五穀豐登の意を取るとて、十三、十七の二夜を加へて現在のやうに五夜としたのである。

李商隱の詩に、月色燈光帝都に滿ち、香車寶輦通街に溢るといふがあり、王安石の詩に、別に開く閭閻壺天の外、特起す蓬萊陸海の中といふがある。唐宋におけるこの夜の燈火の布景の、いかに雄大綺麗であつたかも想見されるが、かの『水滸傳』に見ゆるところを以てすれば、明代におけるこの夜の熱鬧と嬉遊とは、殊に民衆化してゐることは、『開元遺事』や、『天寶遺事』に見えるところに比し、敢へて貧弱であるとも思へない。清朝に

西太后の派手好

燈宴

入つてからは、殊にその中葉以後において、外交關係から一時中絶を見た都市があり、いはゆる半植民地的に世智辛くもなつたが、民間の祭禮氣分は、決してそれがために絶滅したわけではなかつた。派手好きの西太后在世中の宮中における盛宴の狀と、京師六街の彩燈火炮の盛觀とを書いたものを見ると、どこに國事艱難などいふことがあつたらうと疑はれる。中南支那でも同樣であつた。中產以上の家は、戸戸みな中堂に大きな二本の蠟燭を燃やし、あるひは筵席を設けて互に往來宴賞した。また、神廟、寺觀では層塔を架し、長竿を樹てて、これに燈火をかけ、會館などでは、燈宴といつて萬盞の花燈に一齊に火を點じ、終宵鼓樂した。そして街上には、男女の遊人が隊をなしたものである。日支事變は、この元宵節の行事にも、多大な影響を及ぼしたであ

らうが、しかも、治安を恢復した南北都市の案内記や、雜誌や、畫報の類を見ると、全然中止されたところはない。この行事が、ただに行樂のためにされるのでなく、宗教的に禳祓の意義があり、これを行ふと行はざるとが、人の一年の休咎に關すると思ひこめるにも因るのであらう。ここには、事變直前のそれに關する二三の記事を作らう。

畫燈

畫燈

街頭もしくは家内にかけて裝飾とし、玩賞用とする畫燈には、紗、絹、玻璃、明角といつて角を以て透きとほるやうに作り、それにおのおの『三國志』、『水滸傳』、『西遊記』などの小說、戲曲、傳說上の人物や、花鳥、山水を精妙に繪いたものがある。型に意匠を

氷燈

麥芽燈

龍燈

凝らし、子供のために提げるやうにしたのには、走馬燈の廻轉して眼を悅ばすものの外に、家鴨や、胡蝶や、自動車、飛行機までである。北京などには、氷燈とて、山や、巖や、人物や、鳥獸などを氷で作り、その內部に灯をともすやうにした珍らしいものや、氷を容器として、その中に麥の苗を植ゑて人物を現はさしたのもある。木または竹で骨骼を作り、外部は布を貼つてこれに繪畫を施して龍の形となし、長さ三四丈から五六丈、全體を七乃至十三の節に分ち、節每に一木桿を挿し、その內腹に燭をともし、幾人かで木桿をささげ、街中を往來し、盤旋して舞ふのを龍燈といひ、近年はおいおい少くなつてゐたが、高蹻といふ高脚踊とともに行はれてゐた。

高蹻

高蹻（カオちゃす）——橋燈（ちゃオトン）

高蹻（カオちゃす）、高脚蹻（カオちアオちゃす）ともいふは、十人から二十人までくらゐで一隊をつくり、隊員おのおの劇中の人物などに假裝し、手に手に一燈を携へ、兩脚に竹馬を踝にしばりつけ、街上を往來して歌舞するのである。これに似たものに秧歌（ヤンコ）がある。ただ、異なるところは、踝に竹馬を縛らぬだけ。その秧歌（ヤンコ）といふのは、南方の農夫が、水田に挿秧する際の歌謠に類するからである。

秧歌

旱船

旱船（ハヌちオワヌ）といふがある。木を骨とし、布を張つて船の形を作り、一人もしくは二人の少婦に變裝したものが、これに駕して遊行するもので、多くの場合は二船とし、一老漢の船を推すものと、一老漢の船頭に假裝するものが附隨してゐて、陸地を水面に擬し、船

火塔
星橋

をやりながら、各種の歌曲を唱ふのである。

これ等の燈火を主とする元宵（ユアヌシャオ）の遊戯は、南北おしなべてとても盛んに行はれてゐるもので、行はれざる地とては稀れである。江南の風俗詩である『蔡雲吳歈（つアイユインウユ）』にも、看殘大（かヌつアヌタ）燭鬧（チゥナオ）元宵（ユアヌシャオ）・划出旱船（ホワちウハヌちオワヌ）忙打招（マンタチアオ）・不放月華侵（ブファンユエホワちヌシャチエ）下界（イエヌカヌ）・煙竿火塔（ホウオたイウ）又星橋（シンちャオ）といふがある。蘇州（スウチオウ）は水郷で、橋あれば柳あり、柳あれば橋ありとも、姑蘇（クスウ）三百六十橋ともいふほどに橋が多いので、その橋梁の上に高い塔をしつらへ、塔の層毎に燈火を懸け、または、橋欄に沿うて竹を立て、それに索を引いて燈火を懸け、橋燈（ちゃオトン）とも、星橋（シンちャオ）ともよんだ。詩はそれを詠じたもの。歈は吳歌の意。

二、三官誕（サンコワヌタヌ）辰（ちエヌ）

三官誕辰

正月十五日を三官誕辰として、沐浴して衣を更め、香火を寺觀に奉じ、もしくは自宅において敬虔な祀りをする。三官とは、天官、地官、水官の三體で、正月十五日すなはち上元は天官、七月十五日すなはち中元は地官、十月十五日すなはち下元は水官に割當て、篤信者は右の三ケ月の一日から十五日まで素食して戒を持する。これを三官素といふ。しからざる者は、一月の中の一・七・十の三日だけ齋戒する。これを花三官といふ。

三官素

花三官

三元の名は、『魏書』、『舊唐書』などにも見えてゐるが、三官が月を主ることは言つてゐない。それが後代次第に進化して、人間の罪福を考定する神となり、長齋讀經して身世の福を禱らしめることとなつたのは、全く道教の普遍によるので、その源は漢の張陵の子の張衡(一に修とも)に出たものといはれてゐる。す

五斗米道流弊

なはち、彼の五斗米道は、時代の下るに隨つて形を變へ、近代には三官に、上元一品天官賜福、中元二品地官赦罪、大帝、下元三品水官解厄、大帝などの名號をさへ附し、その名號によつていやが上に迷信者を得たのである。

素・蔬・齋

素は蔬に同じく、喪事にいふ素でなく、菜食無肉の意である。中南支那では素も、蔬も、齋も三者同義とされてゐる。素を持すると稱するものも、嚴密に齋戒するのは多くないが、その心もちだけは、邪物を防ぎ、その嗜欲を訖め、專ら精明の德を致して、しかる後に神明に交はらんとするので、相當な社會的地位を占むる人物中にも、意外な素食者を發見することもある。江南のこの夜には、朱墨二色で一字おきに三官大帝と書いた神燈を門首にかけた家がある。これは寺廟に進香したしるしであり、また、寺。

廟から贈られたのである。

三、娘奶神誕。

娘奶神誕

福州を本地として、東南支那海沿岸にわたりて、この日を娘奶の神誕(方言では半丈とも)として、女子供の多い家では、迎年と同じやうな饗宴を設け、爆竹を打ち鳴らす。子供連の提灯行列なども行はれるけれども、畢竟は家庭を中心の行事の一である。

娘奶夫人廟

本尊たる娘奶夫人の廟は、福建の沿海諸地の郷村ならば、一村必ず一廟があり、祭事は共同で行はれる。神事區域を超絶した女神とされてゐるからである。

夫人事蹟

娘奶の事蹟を傳へた地方誌、隨筆、稗史の類は少くない。かの『三教搜神大全』にも大奶夫人として載せてゐる。いづれも

顯聖

多少の相違點はあるが、娘奶(福建方言で母の意)は、姓を陳、名を靖。姑(一に進姑とも)といひ、福州の下渡の陳昌の女。母は葛氏。唐の大歴二年(一に天祐二年)正月十五日に生れた。劉杞に嫁す。孕みて數月、大旱ありて田苗ことごとく枯る。彼女胎内の子をおろし、民衆のために雨を祈る。驗ありて狂風大雨す。ついで彼女はそのために卒つたが、臨終にあたり、われ死する後、必ず神となつて人の難産を救はうとの言を遺した。年わづかに二十四。その後、建寧の一婦人が、懷孕十七ケ月に及んで産せず、大いに苦しんでゐたのを、幻形に見はれて治療した。その婦人は數千の蛇を産んで無事だつた。古田の臨水郷に白蛇洞といふがあり。大きな蛇がゐて毒氣を吐き、年々人を害ねた。ある日、朱衣をつけた女が、劍を執りて洞内に入り、蛇を索めて斬り殺した。

郷人これを見て、その姓名を問ふと、下渡の陳昌の女なりと答へて姿を消した。すなはち彼女のために廟を立てて洞に祀つたといふのが、諸書の一致するところである。南宋の淳祐のころ、崇福昭惠慈濟夫人に封じ、廟に順懿の額を賜ひ、また天仙聖母・青虛普化碧霞元君を加へられた。臨水陳太后とも、臨水夫人ともいふのは廟の所在地の名に因み、順懿夫人といふのは廟名に因むのである。彼女に對する南方の人の信仰は、北における娘娘に對する北方の人のそれに及ばない。また、南方の人の海上守護神とする天后の廣範圍なるにも及ばないが、しかも南方婦人における娘奶は、子を授け、產を安らかにする女神として、彼女以外に彼女はないのである。正月十五日と八月十五日との年二度の祭禮に、福州の塔亭にある娘奶廟に押し寄する參詣者

の夥しさは、むしろ物凄いまでである。ここで參詣者に授ける請花は產まるべき子の性を決定するものと信ぜられてゐる。男は白花、女は紅花、子なきものは無花すなはち鐵襖(襖は樹と同義に解せられてゐる)である。しかし、さらに一層熱心に娘奶を信心し、祈願をこめると、花の色は變ずることがあり得、子無きも白紅花を得べき望みありといはれてゐる。

三、接坑三姑娘

上元の日と、その前後、半ば祭祀、半ば娛樂の行事がとても多い。異彩ある一種の支那通である米國商人のカール・クロウは、支那ではいかなる小さな町にも、生活必需品と共に靈魂祭祀用の器物が賣られてゐる。支那は靈魂の百貨店だとよんでゐる。彼

の言は決して惡意を有する皮肉から出たのではない。けれども、クロウのいはゆる靈魂祭祀に費すところは、有錢有閑の大家ならば知らず、大多數の民家では必ずしも多くない。むしろ外國人が想像するよりはるかに少額なことは、未だ曾てなき正確さを有するシドニー・ギャンブルの『北京の家族生活の宗教費』の項を讀めば、よく合點される。

紫姑

十五日の夕、紫姑を迎へるとて、女たちは香燭と糕餅菜果とを供へて、一年の蠶桑その他の吉凶を占ふ半遊戯をする。古い風俗らしく、李商隱などの唐人の詩にも、宗懐の『歳時記』などにも見える。江南では、これを接坑三姑娘といふ。傳へられるところによると、紫姑の姓は何、名は媚、字は麗娘、萊陽の人。それが壽陽の李景といふ人の妾となつたが、嫡妻にいぢめぬかれ、常

に汚物掃除にこきつかはれたために、正月十五日に自ら世を早めた。で、後世の人、彼女の形をつくり、夜、厠や豚の檻あたりで、子胥（壻）在らず、曹姑は歸り去れり、（一に曹夫人は己に行けり）小姑まさに出でて戯むるべしと祝して、彼女を迎へるのだといふ。彼女の靈、願ふままに出で來たといふやうな話もある。北支那のある地方の郷村の女たちが、十三日の夜、おのおの箸三本づつを手にし、姑姑靈・姑姑聖・筷子姑姑有靈應と歌ひてする願ぎ事も、多分、これに類するのであらう。湖南の長沙にも、これに類した瓢姑姑神といふがある。これは水を汲む瓢一個と竹箸とを用ゐてする。又、安徽の壽春にも、正月九日を以てする九娘神といふ相似たものがある。

請姑姑

瓢姑姑

九娘神

百草靈

帚姑
針姑
葦姑

青衣神

百草靈——蠶神

江南の女たちの間には、帚姑、針姑、葦姑の靈を請じて、來る年の吉凶をトするものもある。これを百草靈といふ。又、養蠶地では蠶神を祭るものがある。帚姑といふは、古る箒に裙をくくりつけて人形のやうにして願ぎ事するもの。針姑は、糸を通した針の、頭と頭とを相對せしめ、その尾が相屬するや否やによつて伺ひを立てるもの。葦姑は、葦莖の分合するのによりてトふもの。百草靈といふは、正月は百草みな靈ありといふ意。蠶の神を俗に青衣神といつてゐる。青衣神は、一般に、民に文字を曉らしめ、蠶桑の業を敎へた蜀王蠶叢のことと解せられてゐるが、江南の村祠に祭られてゐる蠶神の塑像は、頭に高髻を結び、蠶

蠶姑
馬頭娘

を左掌に掬ひ、身には彩衣をまとへる女體である。そして明かに蠶姑とよんでゐる。同じ四川省で、俗に馬頭娘とよばれて馬皮を被れる女體の神とも違ふやうである（『三教搜神大全』には、馬頭娘を蠶女娘娘とし、乘馬姿を繪いてある）『淸嘉錄』には、王成なる人が蠶神に遇へる故事によりてとある。すなはち、吳縣の王成（一書には張成）なるもの、元宵の前夜、一少婦の家の東南角に立てるを見る。彼女曰く、あすは十五日、よろしく白粥を作り膏を浮べ、以て我を祭るべし、まさに汝が蠶桑を百倍たらしめんと。成、その言の如くすると、その後、大いに儲かつたとあるもの。但し淸朝時代、杭・湖・嘉・興・三府下の二十三地において、官吏を派して公けに祭を致さしめた先蠶は、まぎれもなく黃帝の元妃西陵氏で、乾隆五十九年、黃帝廟に合祀させたことが記錄

先蠶西陵氏

されてゐる。なほ、この地方には蠶太子とよばれるのがあり、その畫像を祀ることが、新進作家茅盾の『春蠶』に見える。

一四、走三橋

走三橋
走百病

この夕、江南の婦女は、相率ゐて門を出で、必ず三つの橋を渡りてかへる。十六日には子女皆な高きに登る。事變前の南京の城壁もしくは丘陵は、それ等の人が蟻の如くに群れてゐた。ただ、北京では、走三橋、走百病とともに、元夕に兼ねてするものがあるやうで、潘榮陛の『帝京歳時紀勝』には、一人、香をもちて人を避けしめ、走百病といふ。凡そ橋あるところは、三五相率ゐて過ぐ、これを度厄といひ、俗に傳へて、走橋といふとあつて、三つの橋と限つてゐない。二者ともに腰脚の病にかからぬまじないで

ある。

一五、塡倉

塡倉節

一月二十五日を塡倉節(一に添とも)といふ。民家は牛羊豚肉を買ひ入れて終日吃ひに吃ふ。客の到るがあれば、無理やりに引き留めて馳走責めとする。正月が過ぎんとして、買ひ溜めの食料品、薪炭など、すでに空虛となれるため、新に購ふて充塡する必要がある。塡倉とはその意であらう。ある歳時記には、米屋、穀物問屋の倉神を祭る日で、倉神は漢初の三傑の一たる淮陰侯韓信であると見えてゐる。倉庫の充實を祈る意に出づるは一

倉神祭

韓信倉神說

であるとしても、韓信を倉神なりとすることは、何に因るのであらうか。項羽の下を亡げて劉邦に歸して後、一時、彼は治粟都尉。

に拜したことがある。倉神とするのは、この故事によるのであらうか。ただ、蘇州にあつた豐備義倉の、古圖を見ると、倉廳の樓上に『倉王之神』と書かれた廣間がある。倉王と倉神とは同一と解してよいのか。これも確むる途がない。

倉王之神

廿五日を大塡倉とするものもある。倉となすに對し、前二日の二十三日を小塡倉とするものもある。酒食に飽足することは、二十五日に同じ。

天津およびその附近にかけて、この日、面白いことをする。すなはち、晩食の後、白粉にまぶした筆で、もしくは灰炭で、院内の然るべき地面へ、大小隨意の圓い輪をかく。そして門外に向ふ方の圓圈の一端に、再び一個の梯子をゑがき、しかる後に、再び圈内に一撮みの米を盛上げてから、煉瓦をもつて來てそれの上にしかと壓へつけておき、それを打囤。それを畢ると、今度は

打囤

住屋内のある場處に、前と同じやうな圓圈をゑがき、銀貨、銅貨などをくるんでおき、それに煉瓦のおもしをかけて、弔錢だといつて喜ぶのである。

弔錢

又、この夜は、鼠の嫁入りの晩だとて、いつもよりは早く寢床に入り、燈火も早く消す風俗がある。但し鼠の嫁入りの日は、地によつて日を異にし、北方はいづこも正月中の一日とするが多い。南方にもある。蓋し全國にわたる兒戲に類した緣起かつぎであるだらう。

鼠の嫁入

江蘇でも似たやうな畫米囤といふことをする。米を貯へる場處に、石灰で地を區劃し、戟矢元寶の形を畫く。災をはらふ意であるけれども、北の塡倉と同日でなく、十二月二十五日である。

畫米囤

二月

一、太陽生日。

中和節遺風

二月一日。太陽生日とて、北京をはじめ、北支那では太陽鷄糕とよぶ米の粉團子を作つて祭る。唐代の中和節の遺風で、その時代には、朝廷で百果菜穀の種子を盛つた囊を民間に賜ひ、百官に農書を獻ぜしめた。前清の盛んなるころは、米粉で糕を作り、その上に金烏圓光を印したものを用ゐて太陽を祭つた。この頃は、麥の粉製を五重にして、その上に一寸ばかりの鷄を作つたものをつき挿し、太陽鷄糕と名けて市中で賣つてゐる。その祭神を俗に太陽星君といひ、正月各門戸に貼つた五色の挂錢など

大陽錢糧

どを引き剝がして、この日に焚く。これを太陽錢糧といふ。太陽宮がある土地では、そこに詣でて禮拜するものがあり、又、齋戒して太陽經を誦するものがある。

二、土地神生日。

土地公公生日

二月二日は土地公公生日、すなはち土地神の誕辰で、又龍擡頭の日にあたる。土地廟は、パール・バックの『大地』に、祠の高さは人の肩に足らず、灰色煉瓦で築いた屋根下に、小さな嚴肅な顏の二つの土偶が祭つてあるといへるもの是れである。内地の僻邑には、右のやうな貧弱極るのもあるが、富裕な都市の官廨内に、もしくは民間に祭られたのには、隨分見事な建築がある。そしてアーサー・スミスも『支那の村落生活』にいつてゐるやうに、

古への土示

この土地廟と關帝廟とは、最も普通に存在するもので、到る處にある。神體は古への土示すなはち地祇。ほぼ我が國の產土神にあたる。山林川澤原隰の神に、その地方に功ありし人を合せて祀る。俗に土地神に夫人を配して田公、田母とも、やや古めかしく社翁、社母ともよぶ。田舍の人は、このころ、恰も農耕開始にあたるので、これを祀つて農祥を祈念するのである。

敬稱。

三、龍擡頭

引龍廻

龍擡頭の日は割合に重く見られる。北方の農村では、門外から門内へ、さらに臺所の水缸のほとりまで、灰を細長く蜿蜒とまきめぐらして引龍廻とよぶ。蟲をわかさぬまじないである。

薰蟲

都人士は米粉で食べものをつくり、これを油煎して薰蟲と名け

掌腰糕

てたべる。江南では正月の年糕を油煎し、炒豆を添へて地神を祭り、また家内でも食ふ。油煎の年糕を俗に掌腰糕といふ。掌は支柱の義で、定と通用される。芝居を催すところもある。

龍擡頭の日は、また、嫁が里歸りをする日。古風な村塾の始業の日。ただし、針仕事を禁ずる。龍の眼を傷ける恐れがあるからとて。

四、文昌帝君誕。

文昌帝君誕

二月三日は文昌帝君の誕生日。近年はやうやく廢れかけたが、清朝時代には、特に大吏を派して祭をいたさしめた。宮、寺、會館、善堂など嚴かに祭事を執り行ひ、舊い型の文字ある人が禮拜に出かけた。もとは星の文昌宮、すなはち斗魁戴匡六星(俗に南

斗魁戴匡六星

斗)をさし、これを大貴をつかさどる吉星として祭つたのである

梓潼帝君

が、中ごろから、梓潼帝君と一しよになつてしまひ、俗に廟を梓潼帝君廟ともよんでゐる。梓潼帝君なるものは、姓は張、名は惡子とて、四川省の梓潼縣の七曲山に住んでゐ、晉に仕へて戰死したのを祀つたのであるが、唐・宋に封號を加へ、元に帝君に進め、天下の學校に廟祀せしめ、明に入りて一たび廢毀し、また、その後に復活させたのである。元初に七曲神君などといつたのは、この張惡子で、明かに、全然、斗宿の文昌星と拘はりはないさうである。

七曲神君

ただ、科擧が行はれた時代を通じて、かかる道教臭の甚だしい話說の類が、とても多い。

五、百花生日。

無雨百果熟

花朝は、百花生日。最も野趣と詩趣とに富んだ民間行事の一で、唐代の遺風である。かの越王勾踐に事へ、後に五湖に泛んで去り、終りに巨富を成したといふ范蠡の『陶朱公書』なるものには、二月十二日を百花生日とす、この日、雨無ければ百果熟すとあるとて、江南の人はいたく天候を氣にする。有利・無利・要看。二月十二日の農諺もある。十二日を十五日としてゐる地方もある。北方では、窖藏されてゐた花卉を、このころから取り出して賣り、早咲きの牡丹もやうやうふくらむが、南方の普遍的なのに比ぶれば、北は文字ある有閑階級にかぎられた節令である。『蔡雲吳歈』に、百花生日是れ良辰・未だ花朝に到らざるに一半の春・紅紫萬千錦繡を披く・尙ほ點綴を勞して花神を賀す(ここにいふ花朝は、廣い意味での春のあした)といふがある。大家の閨

秀から水呑み百姓の娘ッ子にいたるまで、賞春の心を動かす。

この朝、邸内に花園菜圃を有する家ならば、一家の人、齊しく早曉に起きて庭に出で、花草樹木の枯葉を拂ひ、地にしける落葉を掃き、花壇の土を翻動し、それが終ると、紅紙の條としたもので、樹根と花莖とを捲き、さらに紅紙もしくは色ある帛を剪つたのを、長く花枝から花枝へ引き渡す。風が來てひらひらと飜すのを見ればそれを賞紅とて嬉しがる。青春妙齡の女たちは、おのおの好める色、好める香の花をとつて、髮に襟に挿す。すでに母となれるは、幼きものの帽に襟に點着する。路上を行く女の兒は、みな花を簪してゐる。花神すなはち司花の神は、女夷なりとするがあり、風神なりとするがある。道術家の崔元微（玄微とも）が故事に基くと說かれてゐる。彼は春の一夜、十餘の花の精なる

賞紅

花神

崔元微故事

美少女たちに、美酒佳肴の饗をうけた。そして一同から遲れて來、且つ早く去れる老女の十八姨の去れる後、少女等の懇請を容れて、赤幡に日月星辰を畫いて、それを花園にたててておいた。翌晨は烈風だつた。が、その花園の花草だけは全然無事だつたといふのである。唐の女傑、則武天に關したあどけない童話もあり、又、詩話などもある。

六、觀世音誕日

二月十九日を俗に觀世音の誕生日とし、凡そ寺廟が存在するところは、型の如き讀經などの儀式の外に、市が立ち、奉納芝居があり、參詣者でいづこも雜沓する。參詣の男女の中には、佛前に長明燈油を寄捨して、無事長命を祈念するものがあり、あるひは、

觀世音誕日

子を求めて子を得たりなどと書いた長幡を奉納したりし、また、生める子を觀音に歸依させて、その申し兒とするために署名したりするもある。これを寄名といふ。支那における觀音は慈悲の女性であつて、子を授らんことを祈れば子を授くる佛であると信ぜられ、その總べてにあらざるまでも、送子觀音とか、送子觀音娘娘とかよばれて、畫像も塑像も、嬰兒を膝の上にかき抱き、もしくは嬰兒の禮拜をうけてゐるのが多い。家庭の構成が日本あたりと事情を異にし、嗣子を擧げざる女は、必ず不幸な一生を送るべき約束の下におかれるのを常とするために、彼女等の觀音信仰は、とても外國人の想像の及ぶところではない。すでに子あるも、その子が羸弱な體質である場合も、その母は無事成育を祈るために、觀音信仰はますます盛んにもなり、廣くもなる。

歸依寄名

東洋通の英國記者J・O・P・ブランドは、新流行の服裝をつけ、新しい教養ありげな若い婦人が、觀音道場に進香供養してゐるのに駭き、支那には新しいものがない、新らしいものもまた實は舊いと、曾てその通信中に論じてゐる。かかる信者の間には、また、善士と稱せられる人の中には、二月一日からこの日まで、六月、九月の二月も一日から十九日まで、觀音素ととなへて齋戒をつづけるのがある。北京では、一年に三度、すなはち二月十九日、六月十九日(登蓮臺とよんでゐる)と、九月十九日(傳道妙とよんでゐる)の同じく誕辰と俗稱されてゐる三日の中、この日が最も盛會であるらしく『北平史蹟叢書』にも、廟宇千百を下らず、みな誦經聚會すとある。福州も年に三回であるが、佛興の市內巡遊は二月だけ。杭州は六月を盛んな時とし、十八日の夜、信徒相率ゐて湧

ブランド驚く

觀音素

天竺露宿

金門を出で、西湖を渡り、天竺に到つて一夜を露宿するものが多く、伏日から冬至に至る期間、民間の廟宇禮懺と齋戒とが打ち續いてゐる中でも、これが第一である。廣東、上海などの都市でも、六月の誕辰が最も熱鬧する。

三　月

一、寒食

寒食は清明節の前二日。冬至から百五日にあたる。火を禁じて物を煮ず、冷食をとる。晉の介之推(一に綏に作る)の故事によりてといふが通說である。介子推は春秋時代の人。晉の文公と共に出亡し、流浪すること十九年。文公が饑ゑに迫つた時には、股の肉を割いて啖はしたこともある。しかるに、文公は國に還つた後、彼に報うるところが薄かつた。彼は母とともに緜山(山西省にあり、沁源、靈石、介休の三縣に亙る大山。介山ともいふ)に隱れた。文公は彼を索めたが、出て來ないので山を焚いた。

介之推故事

と、彼は木を抱いて燒け死んでゐた。火を擧げないのは、彼を哀れみてといふのである。その實は、周の舊制に出づるので、介之推に拘はりはないとのことである。今は、北支那の一部を除いて殆んど名ばかりの行事となり、清明節と一しよにされてゐる。

二、清明節

清明は、陽曆の四月五・六日にあたる。立春、雨水、驚蟄、春分と、その十五日後に來る穀雨と共に二十四節の一である。南北いづこを問はず、この日を祖先の墳墓を祭る日とし、道遠くとも、壺を提げ、盒を擔ぎ、饌を具へて行き、墓前にそれを獻げ、紙錢を燒き、香を焚き、うやうやしく禮拜する。新たに婦を娶れるものは、必ず同行せねばならぬ。新に葬りたるものは社前で祭掃される。

踏青

楊柳球

眼亮花

支那の墓地は、多く城外に設けられ、城内に住めるものも、家祠を郊外に建ててゐるのが多いので、墓參は勢ひピクニック化する。『東京夢華錄』に、四野、市の如し、往々にして芳樹園囿の間に就き、杯盤酬勸すとあるから、上墳野祭とともに游春玩景を兼ねてするものが、昔から多かつたのであらう。今は、それを踏青といひ慣はしてゐる。昔は三月三日。二月二日を踏青節といつたこともある。

この朝、掃墓に出づるものも、出でざるものも、男女みな楊柳の枝、もしくは麥の葉をわがねて髮に戴く。江南では、これを楊柳球とよび、清明柳を帶びざれば、紅顏皓首を成さんとの諺がある。これに先ちて、三月三日には、薺の花(俗に野菜花)を髮に簪して、目をすずしくするまじないとし、これを眼亮花といふ俗もあつて、

この頃、野の花を摘んで髪に挿すことは、けふの楊柳とはかぎらないが、この日の楊柳は必ず忘れぬやうにする。市街地では、朝早くから楊柳の枝を賣りに來る。北京では、清明に柳を戴かざれば、死後黄狗(黄巣とも、唐の僖宗の時の叛將にこぢつけて)に變ぜんとの俗諺がある。また、北京では、豌豆黄といふを食ふ慣はしであるが、江南では青糰・紅藕(俗に炒熟藕)を食ひ、筍と鮮魚とを煮て馳走とする。青糰は萵苣の芽をまぜて色をつけた餅、炒熟藕は蓮根の孔に砂糖飯をつめて蒸したもの。炒、音鳥。吳語。

青糰紅藕

三、孫總理忌辰—植樹節

植樹節は、民國四年に規定した新しい節日。清明の日を以てする。もとはアメリカの西部草原地方に行はれるアーボア・デ

イに倣つたのである。中央政府が北京にあつたころは、大總統親しく天壇に赴いて植樹した。國民政府となつた後は、陽曆三月十三日の孫文總理逝世紀念日をふりかへて植樹節とし、二節日ともに並び行はれてゐる。政府と國民黨との諸機關、學校、銀行など一日休業する。時によりては樹苗などをわかつて植樹を奬勵することもある。

四、蠶月

養蠶地

養蠶は、西曆紀元二世紀前から始つて、現に支那において最も普及してゐる特殊な農家の仕事の一である。その生産される主要な地方は、南は西江デルタ、中部は揚子江流域の江蘇、浙江、安徽、主として太湖附近の廣い平野、および北の山東と、西の四川で

ある。中にも西江デルタの好き條件を備へたところでは、桑の葉が年に七回採取できるので、蠶も從つて七回飼育することができる。揚子江下流のデルタでも、年に二三回は飼養できる。かやうに、謂はば支那農民の重要生産であるところから、歴代の君主も能ふかぎり、これを奬勵もし、その豐産を祈つてゐる。

皇后親蠶

周の天官の中の內宰といつた皇后宮職には、その職制として皇后親ら養蠶することをも規定し、中春、后に詔げ、外內の命婦を率ゐて始めて北郊に蠶し、以て祭服をつくらしむとある。中春は夏暦の二月、周暦の四月、現行の陽暦の三月である。清朝にいたつても、皇后親蠶の禮は、民國となる少し以前の光緒二十八年まで、年々繼續してゐる。康熙帝御製の『耕織圖』の序にも、豐澤園の畦畔に桑を樹ゑ、旁らに蠶舍を列し、浴繭繅絲、恍然として茆簷

織耕圖御製序

蔀屋の如しと見える。下つて道光、咸豐、同治となつても、三月の初めから半ばごろまでの間に、必ず皇后みづからか、もしくは內務府大臣を代理として、先蠶壇で禮を行つてゐる。從つて民間においても、養蠶を重大視すること、單に經濟上からと視る以上なものがある。

蠶忌

蠶神を祭つてその豐收を祈るばかりでなく、蠶忌と稱する各種の迷信も、また從つて飼育者の腦裏を司配してゐる。ここには、浙江における春蠶の舊慣だけについてしるすにとどめる。

育蠶序程

浙江には、清明・穀雨旺修蠶といふ農諺があるやうに、清明に種紙をとり出し、穀雨に掃立てる。すると蠶は七日目に頭眠し、再び六日にして二眠し、又、四日にして三眠し、さらに七日を隔て四眠し、最後に、また五日を經て上山する。上山は草內に放ち

入れて繭を成さしめる意である。そして三日にして回山する。

熱棚・冷棚

回山は繭を收める意である。その間に、熱棚の法をとるのと、冷棚の法をとるとの區別がある。前者は蠶棚の下から火を以て暖めて繭を成すことを速からしめる法であり、後者は自然に成さしめんとするもので、日數からいへば、冷棚の法はやや遲れる。禁忌は大小いくらもある。『秦觀蠶書』に、堰を治むる勿れ、草をかる勿れ、灰を沃ぐ勿れ、室に外人を入らしむる勿れ。この四は蠶神の惡むところとあるが、實際はその四にとどまらない。すなはち、育蠶者は均しく須らく青龍に接し白虎を退くべしとて、魚肉と香燭とを用意し、大門に印刷した門神將軍の畫像を貼り、これに供物をする。青龍、白虎とは凶と吉との星の名であるらしい。寺廟に詣でて蠶花五聖なるものに祈願するものもある。

蠶花五聖

蠶室には滅多に人を入れないばかりか、人が大聲で喚ぶことすら許さない。喪服でもつけたものが入り來れば、それこそ大凶である。蠶室内に蛇が出たら、驚いてわめき立てたりしてはいけない、青龍が降臨したのであるからとて、供物をささげた後に自由に去らしむべしとする。蘇州では養蠶家を蠶黨とよぶ方言がある。立夏には必ず繭山米果といふ米の粉の菓子を作る慣はしもある。

蠶黨

繭山米果

五、蠶業地生活

ここに、ついでながら、養蠶地の農民生活を叙しておきたい。例を上海、蘇州に近い嘉興に取る。嘉興は財賦の區とも、魚米の利を有する富裕な地ともされてゐるが、米は自作、菜蔬は自種と

するも、油鹽薪炭は外人から仰がねばならず、養蠶を主なる副業としなければ、楊柳、果樹、蔬菜、菱藕を種植しても、その收入では不足する。絹織物の產地にも近いし、交通も如實に四通八達のところであるけれども、農村の男女で、絹物を身につけてゐるものなどは、極めて稀れである。彼等は、一年中でわづかに正月と十二月との二ヶ月のみ、やや暇らしい暇のある時で、正月の上半期は親類友人の家へ客となつたり、自家へ客を迎へたりし、女たちも暢び暢びした氣で、金のかからぬ娛樂をもち得る。が、正月も半ばを過ぐると、男は桑畑の鍬入れにかかり、女は鞋襪の手仕事をはじめねばならない。二月にかかると、桑畑の草取りと、瓜蔕豆菜の種蒔き。三月が最も忙しくて養蠶にかかると同時に、田地も見廻はらねばならぬので、飲食睡眠の時間さへ不足する。

時令

寢食不食

四月は蠶が上簇するから、自宅で絲とするものは、その準備がいる。繰絲が畢れば、豆のとりいれ、麥刈り田植の用意である。諺に跨出絲車・踏進水田といふ。五月は鋤田、灌水、挿秧、施肥、芟草、男女とも戰の場にあるやうに働きに働く。六月は植付を畢つてゐるが、なほ施肥、灌水、除草、驅蟲を要する。七月はやや落ちつく。ただ女たちは絹物を織らうとするなら、絡絲その他の準備にかからねばならない。八月は桑田の泥土を飜へして、菜類を蒔き菱をとるなら此の時。また、早熟の稻もこのころに刈らねばならない。九月には收穫。それが畢つたら田の土をかへして畦をつくり、豆麥を種蒔く預備。十月には遲れても米穀登場、女たちは畑に出でて菜、豆、麥を種ゑる。十一月は打穀舂米、小作料を納れるものなら納租の必要がある。女はみな紡織。十二

月にやつと少し息がぬける。男は農具の修繕やら、女は衣類のつつくりやら。大體はわが國の行事に似てゐるが、どちらが樂であるやら、はつきりいへない。彼等の間に三忙といふ常諺がある。一を蠶忙、すなはち養蠶。二を水忙、すなはち稻の植付。三を旱忙、すなはち收穫である。また、彼等は蠶さへうまくできたら、五穀豐登で、安心して新年が迎へられるといつてゐる。彼等の生命線のあるところを知るに足らう。

六、採茶

火前は嫩らかに、火後は老ゆ、惟だ旗火あり品最も好しとは、清の乾隆帝が、茶の名所たる杭州の龍井に遊べる際の採茶歌の一首である。火前といふは、浙江通志の茶の項に、雨前にその一旗

雨前・火前

一槍を取る、尤も珍品となすとあるそれである。火は寒食禁火の火の意で、火前の名は茶ばかりでなく牡丹の花にもある。上は四川から、湖南、湖北、江西、安徽を通じて江蘇、浙江、福建にかけて、茶の產地は分布し、茶によつて活きる人の數は、棉花のそれによりも多い。土地が南によるに從つて、茶を摘む時は早目となるが、江南の茶山が摘芽をはじめるのは、穀雨を中心として、四月に最も盛んである。茶に雨前、雨後の品目があるのはこれを意味する。清朝時代に貢品とした洞庭の君山の茶も、蘇州の洞庭山の茶も、また、龍井の茶も、ともに穀雨節前に採るが例であつた。

四月少閑人

安徽あたりに、四月少閑人との諺があるのは、幼婦少女はことごとく茶園に出でて摘み、平素は炊事にあづからぬ男子が、この時季だけは、淘米、洗菜、劈柴、燒湯を代つて勤め、そして炊き上げ

た飯と菜とを山上に運ぶからである。俚謠の調に挿秧と採茶とがあるのは、米茶を生産の大宗とするからである。近年は印度茶におされて支那茶は不振に陥つたが、それでも、このころ茶産地を旅行すれば、二日も三日も、娓々として山谷に回音する茶摘歌を耳にしつづけることがある。安徽の六安に行はれてゐる採茶歌二を附記する。蘭花は茶の芽の形容。小小蘭花五瓣。

六安採茶歌

開・三瓣正來兩瓣歪・你要正來正到底・你要歪來僅管歪・不要正正又歪歪。乖は愛らしい、怜悧なの意。己時已過午時中・小乖姐送飯過田中・我問乖姐什麼菜・横切蘿蔔直切葱・一碗燉蛋擱當中。

七、媽祖誕——天后生日。

北の娘娘に當る

媽祖は、一に天后聖母ともいふ。三月二十三日の誕辰となして、支那東南海から支那人の移住し分布するところ、卽ち華僑のあるところと、主に航海通商に從事する支那人の商舶の寄航するところならば、天后聖母を祭る大なり小なりの祠廟を見ざることなく、この日に祭らざることはない。天后聖母は、北支那における娘娘と相當し、もしくはそれ以上に民衆の信仰を得てゐる女神である。寺廟の外、會館、公所で祭典を擧げ、芝居を奉納し、饗宴を催す。わが國にも明・清と交通貿易した時から、德川時代を通じて今日までも、長崎にも、大阪にも、この女神を祭る祠堂と祭典とが傳はつてゐる。天后には、天妃、媽祖婆などの一般的敬稱の外に、順濟、靈衛、崇善福利などの封號によるものがある。その傳記、傳說は、宋の太平興國四年の莆田縣志に見えた

封號

ものが、最も古いと考へられ、『元史』『明清會典』『續文獻通攷』などの文獻にも、神靈の保佑に關してやら、祭祀の官吏特派に關してやら、加封に關することなどが見えてゐる。諸說必ずしも一致してはゐないが、天后は林姓。家は代々福州の莆田の湄州嶼に住んでゐた。彼女は、五代の閩王の時の都巡檢林愿(願とも)の第六女として太平興國四年三月二十三日に生れた。母は王氏。長じて後、祕法に通じ、休咎を豫知した。鄕民の病めるものを立ろに癒えしめた。そして能く席に乘つて海を渡り、島々の間を雲游したので、神女とか、龍女とか人によばれた。昇化した年代は、雍熙四年とも、景德三年ともいふ。その後、しばしば神靈を現はして、難破に瀕せる舟舶を救つたり、風を反へして航海を完ふさしたり、癘疫を驅除したり、解急濟難の靈顯いやちこであ

天后來歷

つたとて、元には海神天妃とし、明には孝順純正孚濟感應聖妃と、し、清には昭靈顯應仁慈天后とした。彼女を觀音の化身とし、また善く嗣を孕むことを司る女神なりとする俗說も廣く行はれてゐて、女人の信仰は決して航海を業とする荒くれ男に劣らない。上海蘇州河岸の天后廟は條約によりて、租界內でも外人行政の及ばざる神聖な區域となつてゐる。

八、東嶽生日

東嶽生日

三月二十八日は東嶽・天齊仁聖帝の誕辰である。東嶽はすなはち五嶽の一で、また、岱宗といひ、山東の泰安縣の北にあるもの。唐の明皇が、この山を封じて天齊とした後、俗に東嶽を天齊とよび、その山神は人の死生を司るものとして、南北の各地とも、

草鞋香

これを祭らざる處とてはない。殊に北方においては、香會（シヤンホイ）といつて盛んな祭儀を催す。江南においても、前一日に東嶽廟（トウユエミヤオ）に詣でて香をささげるのを草鞋香（つアオシエシヤン）とよび、當日は燈火をかかげて鼓樂し、もしくは別に芝居を催す。

放生會

阿彌飯

四月

一、浴佛會

四月八日は浴佛會（ユイフオホイ）すなはち釋迦（シチヤ）の誕生である。南北ともに、大抵の寺々は、一日から法要をはじめ、この日にいたり結緣とする。參詣者には、茶や鹽豆を施し、黃色の旌に普結良緣などとしるしたのを掛ける。篤信の善男善女は寺に詣でて香花を供へ、講堂でありがたい說經を聽聞する。又、寺の本殿前に五色の香水を滿たして盆内に銅佛を置き、普く寄捨を求める。信者の中には放生會（ファンシヨンホイ）を開き、龜魚螺蚌などを往生呪を誦しながら、池水、河川などに放つものもある。また、阿彌飯（ミファヌ）とも、青精飯（ちンチンファヌ）ともいふの

や、烏米糕といふを佛に供へるものもある。飯は楊、桐、南天燭の葉などの汁に漬けた糯米を炊いたもので、糕はそれでこしらへた餅。色に因りて名けたのである。

二、娘娘廟會。

四月に入るとともに、娘娘廟會が、各處に開かれる。北支那から滿洲へかけて、最も民衆的な祭事であり、農具などの市が立ち、參詣者の數も多い。祭期は必ずしも一定してゐず、四月一日から十五日までとするがあり、十八日にいたるもある。滿洲における代表的な大石橋迷鎭山の娘娘は、四月十六日から十八日までであり、北京の西北八十餘支里の妙峰山は、一日から十五日までである。

祭期

娘娘の稱呼

娘娘は本と孃孃に作る。後世、皇后を娘娘と稱する

に至つたが、これは天下の母の意である。北方で娘娘と申し上げる女神の正體は、定說と見るべきがなく、しかも、その娘娘と稱せられるのは二三十を筭するだらう。普通、娘娘廟に祭られてゐる神體は、女人像の三體で、前にいへる殷の紂王の忠臣趙公明の三女すなはち雲宵、瓊宵、碧宵だといはれてゐる。この說に從へば、趙氏の三女は、皆な才色を備へた上に、道術を能くし、武藝にも秀でてゐ、戰場に出るごとに力量を發揮した。三女死する後、彼女等に諡し、祠を立てて祀つた。そして年代を經るままに、三娘娘は、子孫繁昌、眼病平癒、天然痘豫防などの職分を有する慈悲神と化したのであると。他の一說では、娘娘廟の主神は、天仙聖母碧霞元君で、泰山の神の女、原の名は玉女。父とともに東嶽にゐた。曾て玉女の石像を作つて玉女池畔においたのが、久し

娘娘の神體

趙公明の三女說

玉女說

く池中に沈んでゐたのを、宋の眞宗の時に發見し、再び宏壯な廟宇を設けて奉祀し、天仙玉女に封じたのだといふ。又、玉女は玉女でも、もとは華山の玉女であるといふ説もある。さらに漢の明帝のころ、石守道なるものの妻金氏が、中元七年四月十八日に生み落した女兒玉葉なるものが、長じて仙を學び、天空山花岡洞に入りて成道したのであるといふ説もある。ただ、實際についてて見ると、三體の女神の中央におかれてゐるのは、福壽を授くる財福娘娘で、碧霞元君・天仙聖母・天后などの異稱を有するもの。その右なるは、眼光娘娘で、一に治眼娘娘ともよばれて、眼の病の外に、痘疹、癍疹その他の諸病を治するもの。左なるは、子孫娘娘とも、授兒娘娘ともよばれて、子なき女に子を授くるもので、また送子、送生、催生などの異稱を有する。この外に、三女

玉葉説

三體女神俗稱

神とも、嚴かめしい徽號が別に一二ならずある。すなはち治眼は眼光聖母明白元君、授兒は子孫聖母廣嗣元君といふが如くで、北支那では女ばかりなく、男もまた事業の成功、官途の昇進、緣結び、育兒などのために娘娘に祈願するものが多い。そしてもともと北支那の民族神であつたのが、今は觀音の一屬性たる女性が附與せられて、道佛を分ちかねる神權いやちこなる女神となつてゐる。

同じ娘娘と稱せられるものに、蟠桃宮に祀れる王母娘娘がある。祭日は三月一日。この神體は西王母であつて、泰山の女でなく、妙峰山のそれでもない。

王母娘娘

三、藥王誕辰

藥王生日

四月二十八日を藥王の誕生日と稱して、藥王廟、三皇廟、醫王廟といふものの設けられてゐる處では、中旬からこの日までつづいて會が開かれる。市を立て芝居を催すこともあり、藥種商はこの期間だけ割引して賣出したりする。清朝時代は、この廟を醫學とともしてゐた。

醫學

韋古道說

神體は、天竺の人、韋古道、號を歸藏といふ。唐の開元のころ、紗巾毳袍の異樣な姿で、しかも腰に藥を容れた數十個の葫蘆をつけ、長安の街の人に藥療を施したので、藥王の名を賜つたのだとも、あるひは、唐の武后のころの京兆の人、常に烏龍と名けた黑い犬をひいてゐた韋善俊といふ道士であるとも、あるひは、戰國のころの名醫の扁鵲すなはち姓は秦、名は越人のことであるとも、所說まちまちである。が、三皇廟は、もと伏羲、神農、黃帝を祀り、後に神農だけとなり、奉祀

韋善俊說

扁鵲說

三皇廟

の塑像も神農一體だけになつたのだといふ。多分、時代により、これを祀るものによりて、祭神を異にしたのであらう。現に藥王生日を扁鵲降誕とも、藥王菩薩生日などとも呼んでゐる。どちらが正しいかわからない。

四、立夏。

七家茶

立夏は二十四氣の節の一。大抵、陽曆の五月六・七日にあたる。南北いづこも米麥粉を材料とした食品や、野菜、果物を親戚知友と贈答する。江南の茶產地では、すでに新茶ができてゐるころなので、この朝は必ず新茶を煮て一家みな飲み、また、新茶に野菜、果物を添へて人にも贈る。これを七家茶とよぶ。物持ちの家だと、茶の外に茉莉花や、薔薇の花や、木犀の花を乾燥して茶の香

料にあてるものを添へて、瓷甌に盛り、美々しく飾り立てたりする。又、上下おしなべて、立夏見三新（リシヤチエヌサヌシヌ）とて、すでに朱色に色づいた櫻桃、酸つぱい青梅、穭麥（はだか麥）の青々したのを祖先の位牌に供へて、豐作の時を得たことを感謝し、秋穫の多祥ならんことを祈る。そして酒釀（チウニヤン）すなはち一に酒娘（チウニヤン）とも書かれる酒の釀母を加へて甘酸い糯米の飯をかしぎ、一家和氣靄々の裡にたべる。富める家では、その上に三燒（サンジアオ）とて三種の酒と三臘（サンラ）とて三種の臘内を加へてするもある。

立夏見三新

酒娘飯

五、勞動節（ラオトウンチエ）—五一紀念日（ウイチニヤンヂ）。

五一記念日

陽暦五月一日は、五一記念日すなはち勞動節（ラオトウンチエ）である。民國五年のころから、大都市の學生や、新式工業に從する勞動者の間に

輸入されたメー・デーを斯く稱し、街上の運動などは、事變以來、中絶の姿となつてゐるが、大きな工廠などは一日休業する。

五月

一、端午

惡月・毒月

宗懍の『歳時記』に、五月は俗に惡月と稱す、禁忌が多いとある。北京あたりでは、この月は家の引越しを見合せ、窓の紙を貼りかへず、端午には井の水を汲みさへせぬものがある。そして惡五月といふ。江南も、この月を忌むことは同じで毒月と稱するが、特に毒といふを避けて善月とよぶもある。保守的な家庭では、五月に入るとともに、寺や廟から贈つて來る各種の符呪や、掛圖の類を家の各處に貼りつけ、端午の日の用意をする。道佛の篤信家は、殊に婦人たちは、修善月齋とて、つつましやかに物忌

善月

修善月齋

みの生活に入る。

端午異稱

端午は、端陽、重午、五月節、夏節、天中節、女兒節、白賞節などともいふ。五月一日を端一、二日を端二、三日を端三、四日を端四とかぞへて、五日すなはちこの日を端五とする。五を午に作るのは誤ちとの說もあるが、いづれも通用してゐる。中秋、冬至とこれを合せて、最も重要な節句である。いづこも、この日の行事は、大體に相同じく、行はれてゐる範圍も支那全土にわたつてゐる。また、楚の屈原の汨羅に投じた日を記念するためにといふものもあるが、さる狹義の節日ではなくて、極めて廣義の穰災辟邪の意を寓する。この朝、家々に蜀葵、石榴、菖蒲、蓬などの、時の野花野草などを瓶に活け、家內の女たちは、蓬の葉と石榴の花を髮に挿す。これを端五景といふ。幼い女の兒は、彩帛を疊

端五景

ねて福字とし、あるひは、金銀絲で人の虎に乘つてゐる形をつくり、これを健人とよんで鬢にかざすがあり、あるひは角黍、蒜頭、

健人

五毒、老虎などを五色の絲に貫いたものを、首から胸に長く懸けもする。これを長壽線といふ。古の長命縷である。あるひは、細切した菖蒲の根と雄黄とを酒に浸して飲み、その剩りを子供等の頰や耳鼻に塗つてやり、紅硃でその額に王字をかいてやつたりするもある。さらに飲み剩しの酒は、床や寢臺にふりかけもする。いづれも、魔除け、厄病除の意から出たもの。角黍は、糉とも、粽とも、また粽子ともかくちまき。蒜頭はにんにく。五毒は蟾蜍、百足、蛇、蠍、蜘蛛(もしくは蜥蜴)老虎は百獸の王といふ虎。子供の額にかく王字も虎の意。長壽線に用うるは縫ひぐるみで作る。雄黄は又の名石黄、すなはち三硫化砒で黄色の顔料と

長壽線

五毒

するもの。大抵は、この日までに、買ひつけの藥店から雄黄と芷を、酒屋からは酒糟を贈つて來る。芷は白芷(一に茝とも、香りある野草)と蒼朮すなはちおけら、蟲よけとして燻す用にあてるのである。

天師符

驅邪辟災の呪符、圖畫の類も多い。張天師の呪符は、その一である。粗末な紅もしくは黄色の紙に、順風大吉とかいた帆を擧げた龍舟の圖、もしくは鍾馗が劍を揮つて五毒を驅除してゐる圖などに、何やら字とも畫ともつかないものを題して朱印をべたべたと捺したのがあり、姜太公すなはち太公望に財神の神格を與へたもの、聚寶盆、搖錢樹を圖案化したものなど、いづれも印刷したのを、多くは道觀から符金といふ代償を目あてに贈つて來る。これは廣間に貼る。鍾馗の眼を怒らし、髯を逆立て、

邪を驅り福を降しつつある圖は、また單獨で堂中に掛けられる。唐の明皇の夢に、終南山の進士鍾馗と自稱するものが現れて、明皇を害せんとする小鬼を捉へて啖ふたと見て覺め、同時に瘧を病んでゐたのも全く痊へたとの故事に基くといはれてゐる。

鍾馗圖

もともと、この鍾馗圖は門神として正月に貼られたが、いつの間にか、端午の用ともなつたのである。五毒の形を五色紙に印刷し、もつたい氣に五毒符と名け、毒蟲を驅除するに効ありとて、寺などから贈つて來る。これは門楣や寢室の戸に貼るもの。端午の叩符ばかりでない。あらゆる降妖捉鬼の靈顯ありとする呪符の類を、自らも書き、他にもその名義を利用さる張天師といふは、漢の張良が八世の孫道陵(單に陵とも)の裔で、江西省龍虎山に住む古道教の直系をさしていふ場合が多い。現代の教主

五毒符

當代の張天師

は、名を恩溥、字を君臨、道陵から六十三世にあたる。時代が時代として、先年は共產軍にひどい目にあはされたり、國民政府に迷信扱ひされたりしてゐたが、大衆の腦裏には、彼の昔そのままなる勢力が潛んでゐる。

二、競渡——龍舟

綫子・競渡傳說

綫子と戸外遊戯の競渡とは、端午にはつきもので、ともに楚の屈原を弔ふために始められたと說かれてゐる。屈原は、戰國の時の楚の人、名は平、別號靈均。楚に仕へて三閭の大夫となり、その才能を重んぜられた時もあつたが、讒にあひて謫せられ、五月五日、自ら汨羅江に投身して死んだ。綫子は、その姉が弟を祭るために作り始めたもの。競渡は後人が彼を記念するために始

めたものとの俗傳である。彼は南方的な情韻を主とする詩人としての第一人であり、その最後も憫れであつたから、後世、彼を弔ふために糉子と競渡とを附會したのも、民間話説としては取るに足る。現に湖南省には古くから汨羅廟とも、屈子祠ともいふのが一ヶ處ならずあり、揚子江岸の枾歸(歸州)には、彼の故宅に、彼の姉を祭つた女嬃廟といふのさへあり、又、いろいろの傳説が、今日もなほかの地方には語られてゐる。けれども、これには昔から異説があり、糉子は陰陽の未だ分散せざるを象どりてといふもある。江南の競渡は、吳王夫差に仕へて悲壯な最後をとげた伍子胥を弔ふがためにといふもある。今日の實際についてみると、糉子は決して端午だけに用ゐられるのでなく、上海、蘇州、杭州などの江南都市には、清明のころから作り始められ、型は長

女嬃廟

伍子胥説

いの、三角なの、多角型なの、大きさは、一握にも滿たぬ小さいものから、掌大なものまで、内容からいへば、栗、棗、豆を餡とし、もしくは鷄、豚の鮮肉、醃燻肉を用ゐたのがあり、少くとも十數種に上るであらう。そして、ある地方では、小さい多角型なのを、積み重ねて塔の形をつくり、これを廳中に懸けて九連燈を見るが如くにし、四周に紅瓔を垂れて、當日の裝飾に用ゐたりなぞする。

龍舟は、龍船、划龍船、烟囪洞などの名があり、囪は窗に同じく、牕と同義同音。やや古くは水車、水馬などの異稱もある。檣を立てて旌や旗を揚拽し、鼓吹手を艙中におき、兩旁には八人もしくは十六人の划手を排して槳をとり、船頂もしくは船首には、龍頭太子と名けた史上もしくは劇中の人物に扮した幼童を選んで立たしめ、船の指揮者の命令の下に、金鼓の音、水面にひびきわた

龍船

龍船市

る中を、各船競漕して先を爭ふのである。蘇州あたりでは、龍船市。とて、陸には端午まで十日ほどの市が立ち、夜は水上の舟みな

燈划龍船

燈をかけて燈划龍船といふ。この俗は、揚子江上流から、下流の江淮地方、およびその以南の地方にかけて、現在も行はれてゐる。水漲りて日は温かなころである。江山澤國の血氣な若人らには、屈原と子胥との名を問ふを須ゐず、ただ無性に水上遊戯を試みたくもなるのであらう。それは東海、南海と南へ行くほどに盛んなことを見ても肯定せられねばならぬ。すなはち、福州あたりでは、龍船を扒龍船とよび、競渡は一日から五日までの間にする。船の長さ三丈餘、幅五尺餘、五色を以て龍のやうに塗り、舵には尾舵と稱する長大なものを用ふる。船首には纓子をかける。漕手二十八人乃至三十二人。打鼓一人、打鑼一人、舵をとる

福州の扒龍船

もの二人、船首に旗をもつもの二人、これを合計して三十四人乃至三十八人となる。船首の旗持ちは大抵は、寺廟の檀越をつとむるものがあたる。漕手は船夫もしくは船上勞働者である。費用は全部寺廟の負擔。閩江に沿ふた大きな廟には、大抵、二十艘、三十艘とこの龍船を備へてゐる。廣東は珠江灣に注ぐ諸大河の沿流、いづこも盛んに行はれ、中には大がかりな催しなのに目を剝くのがある。廣海といふは、濱海の一小鎮に過ぎないが、このあたりの村々は、いづれも一條の木彫の打龍船を備へてゐる。そして四月八日ごろには、端午の豫行を始めるのである。これを轉龍頭といふ。船の長さ六尺くらゐ、紅色の油漆で塗つてある。漕手は一隊十人足らず、二隊三隊を作る。豫行は鑼を打つこと、歌を唱ふこと。歌の文句は龍船來りて汝が門口に到

廣海の打龍船

る、汝が大なる發財を賀するといつた類である。五月に入れば船の裝飾にかかり、紙子の張飛、關羽といつた古への武將の像を船頭に掲げる。この時、道士を招いて祭をいたすこともある。これを龍船開光といふ。いよいよ當日となれば、漕手等は揃ひの草帽、揃ひの服裝で乘りこみ、鑼を鳴らし歌を唱ひつつ、村々を巡回慶賀するのである。競渡とはやや趣きを異にするが、南方いづこにも、端午中心にかかる遊戯のないところはない。そして各地とも職人は一日休み、てんでに各所を飲んであるく。これを蘇州あたりでは白賞節といふ。現に行はれてゐる浙江の童謠の喫糉子といふに、一箇糉子四雙角，解縛，脱殼，糖蘸，呃得咽落(呃はぐツぐと咽喉を鳴らす形容)と子供たちが糉子をよろこんで喫ふさまを歌つたのがあり、福建の童謠鬪龍舟

といふに、西湖南湖鬪龍舟，青蒲紫蓼滿中洲，波渺渺，水悠悠，長奉君王萬歲遊といふがある。二つともよく端午氣分が出てゐる。

三、關帝生日

五月十三日を關帝生日ととなへて、南北各地とも祭祀を擧げる。近年はやや衰微したが、それでも獻納芝居があり、市を立て、華燈をかかげ、爆竹を鳴らす。北京では、鐵の重さ八十斤なる刀と、紙子で作つた高さ二丈ばかりの馬とを關帝廟に獻げる行事があつた。この日の廟會を單刀會といふ。關羽が吳の魯肅と會すべく、大膽にも一兵を具せずして單身で乘りこんだ故事に因むのである。雜劇の『單刀會』はこの故事を仕組めるもの。

單刀會

雜劇單刀會

磨刀雨

この日に降る雨を磨刀雨（モタオユイ）（水とも）とも名け、生民の平安を主る雨だといひ慣はしてゐる。關羽の誕生は、桓帝の延熹三年六月二十四日で、（北京ではこの日を生誕日として廟を開く處がある）この日ではないらしいが、明の聖祖が北征の際、關羽（ユイ）の神靈が前驅したので、永樂年間に、五月十三日を祭祀の一日に制定したのだといふ。上海あたりでは、竹で弓と箭とをつくり、家内に祀れる神厨にかけるものもある。

曬晾沐浴の日

六月

一、天貺節（テイエヌこワンチエ）

六月六日は、曬晾（シアイリヤン）と沐浴（ムユイ）との日である。この日に天貺節（テイエヌこワンチエ）の名があるのは、宋代この日に天書を降したのに因むのである。清朝時代は、内府において、鑾輿、儀仗から、歴朝の御製詩文、書集、經史の類まで曝凉した。庶民の家では、めつたに浴みせぬ女が浴みし、髪を洗ひ、全身の膩と垢を去る例であつた。また、騾・馬・猫・犬その他の家畜をも河水に沐みさせた。中南諸地においても同様である。江南では、この日、書籍、書畫を曝せば、蠹魚がつかないといふ。猫犬をも河に浴みさせて寄生蟲を驅除してやる。これ

狗醜浴

を。狗醜。浴。といふ。醜は洗ふの意である。又、寺廟では、藏中の經典を取り出して烈日中に曝す。參詣の信心者たちが集りて翻。經。會。といふを營むこともある。翻經十次、來生は男身に轉ずるとの俗説があるので、老婦が殊に喜ぶ。廣東でも、六。月。六。・曬。衣。服。との諺があつて、この日は必ず衣物を檢べ且つ曬す。又、事變前までは龍。母。娘。娘。誕。日。となへて、西江に濱する悅城に參詣するものが多く、死傷者さへ生ずるので、官廳が渡船を禁止する騷ぎであつた。

翻經會

龍母娘娘生日

二、荷花。生。日。

六月二十四日、荷花。生。日。。南京に限りて、この月の四日とする。北京では、もとの宮城内にも、城外にも蓮池が多いので、池邊に出

かけ、柳槐の垂蔭に坐して、酒を酌み蓮の花を賞する。蘇州でも、南京でも、酒肴をととのへて舟を泛べ、水郷の勝景に遊びくらすのを例とし、蓮池を有するものは水面に燈船を放ちもした。荷花生日の由來はわからないが、古くから觀。蓮。節の名が見えてるるさうである。

觀蓮節

三、雷尊。誕。—。老。郎。神

雷齋

。雷尊。誕。は、六月二十四日である。。雷齋。と稱する物忌みには、この月の朔日からすでに入つてゐるが、この日を以て打切りとなる。蘇州では、この期間素食して腥葷を絶つものが多いから、勢ひ肉を賣る店は一ヶ月だけ休業させられたものである。又、この日は、梨園の子弟が守護神とする。老。郎。神。像。を舁いで、。雷。神。廟。に

老郎神

詣づることなどがあつたため、廟祭は非常な賑ひを見た時代がある。今日でも、その形だけは遺つてゐる。洋風に感染した上海あたりの都市に住んで、外人との接觸の機會を有する紳士紳商の間などにも、雷齋に入る前日に齋に入るしるしに、念入りの料理を贈り、齋が明ける日には、再びその志を贈るものがある。

封齋開葷

これを封齋開葷といふ。雷尊の徽號は、正しくは、高上碧宵九天雷聲普化天尊といふ。いかなる神體であるかわからない。

雷尊徽號

ただ、例の俗本『搜神大全』に載せた五雷神とは明かに違つてゐるらしい。

老郎神については、これを明かにしないが、姜鄉雲の『浙江新志』の墮民について記せる一項に、墮民、一律に老郎菩薩を祀る。一尺ほどの長さの小木偶である。演戲の時、これを後臺に祀る。

相傳ふ唐の明皇となす。(北京あたりの劇場の舞臺裏に祀れるは、確かに明皇である)その梨園の首創たるに因るとあり、紹興にては老郎を送子菩薩となし、結婚の翌日、喜娘は老郎を送りて洞房の床上において、香燭を焚いて祭ると書き添へてある。墮民は浙江の東海岸一帶に分布して、一般支那人から賤民視されてゐる特殊階級である。南京の秦淮の妓女などの間にも、老郎會とも、老瞼會ともいふわが國のいはゆる紋日がある。正・六・十一の三月の十一日を、その祀日とする。ここでは祭神を唐の明皇とも、女閻三百を設けた齊の管仲だともいつてゐる。この期に當れば、女ども馴染客を招待して盛宴を張りて大騷ぎする。なほ蘇州にある老郎廟は、もとの織造局の管轄に屬して、毎年中元節の前後の日を擇んで、神を祀り劇を奉納し、それを青龍戲といつた。

墮民の信仰

老瞼會

青龍戲

七月

一、乞巧節—七夕

七月七日は、すなはち七夕。七巧、乞巧節ともよばれる重要な民間祭日。時代によりて儀式も、それに伴ふ傳説の如きも、大きな變遷を見せてはゐるが、『荆楚歳時記』や、『風俗記』に見えてゐるだけでも、東洋人の自然崇拜と農桑時代の星辰に關する神話との形成が窺はれる。

傳説由來

天河の東に織女とて天帝の女がゐた。織抒して勞役し、せッせと雲錦の天衣をなすのを憫れがりて、天帝は彼女を河西の牽牛郎に嫁せしめた。嫁した後、彼女は織錦を廢したので、天帝は織女を河東に歸らしめ、年に一度だ

け會はせることにした。その夜が七夕だといふのである。又、織女、河を渡るにあたり、鵲をして橋をなさしむ。相傳ふらく、七日には、鵲雀、故無くして皆な髢ぐ。それは橋を成すためだといふのである。琴座の織女星と、鷲座の河鼓星が、この夜ごろ、人間の頭上に壯大に輝き光るのを、かく話説化し、さらに白鳥座あたり飛び來た鵲を橋に見立て、いろいろ潤色したのであらう。北方では、この月の一日から七星斗壇を設けて、各道觀で北斗七星を祀り、その夜に供へる巧果を賣るものがあり、女の子たちは小瓦器に麥を植ゑたりして待ちかね、劇場では七夕を限りて『天河配』の一劇を上演するが、概していへば、南方ほどに複雜でなく、且つ金と手間とをかけることをしない。ただ、七夕の日中、杯に水を盛り(これを江南では鴛鴦水といひ、河水と井水とを半々

七星斗壇

鴛鴦水

にして盛る)、女兒おのおの小針を水面に投じて、その水底に映ずる針影を見て、女巧をトし且つ祈る風俗などは同じである。針を杯水に投ずるのを、蘇州方言では磬巧。古くは丟巧針といつた。磬は石を落すの意。巧果は、一に苧結ともいひ『東京夢華錄』に笑靨兒といふのであらう。麪粉に糖を加へて綰ねた食品。星のかがやき始めるころ、桌子を庭さきにもち出し、この巧果の外に、時の花、果物などを供へ、香燭を焚いて、まことしやかに雙星を拜するのである。女兒を主とする祭であり、夜に入りてのまとゐであり、そして遊び興ずるによき初秋のことであるから、總て他愛なく且つ艶めかしい。廣東あたりでは、七夕にいたる一二ヶ月前から、未婚の少女等通心草や、色紙や、胡麻、米粒などを材料として、纖細、奇巧を極めた人形、花果、宮室、器物などを作り、

磬巧
巧果
笑靨兒

六日の夜、これを卓上に羅列し、多くの女兒を請ふて展觀することもある。又、婦人用品を七種づつ一盆におさめ、それを梳裝盆と名け、七夕に陳列し、その前夜を迎仙、その翌日を辭仙と稱して、空を拜することをもする。良緣を星に祈る意に出たものらしい。湖北の武昌では、喫星といつて必ず肉食し、昔風な私塾の學生は、先生に肉を贈ることになつてゐる。

梳裝盆
喫星

二、盂蘭盆會。

鬼月
七月半

七月を鬼月といふ。月の十五日を七月半とも、鬼日ともいふ。七月半の稱は、宋代すでに見えるといふから、俗語としても新しくない。『荆楚歲時記』に、七月十五日、僧尼道俗悉く盆を營み、諸佛に供ふとあるから、盂蘭盆會の始つたのも、千四百年以上に

起原

溯るべきであらう。釋迦の弟子目蓮、その法眼を以て亡母の地獄の餓鬼道に在りて、頭下足上の苦を受けつつあるのを見、これを救はんことを釋迦に請ひ、その教へに從つて、餓鬼に施さん心から、七月十七日、百味の飲食を衆僧に供養し、母の倒まに懸れるのを解かしめたとの佛說盂蘭盆經に基くさうで、寺には寺の禮懺誦經が行はれ、街巷には假臺をしつらへ、棚座を設けて、廣く施餓鬼の法要が營まれる。上海あたりでは、この合同で行はれるのを太平公醮とも、打醮ともいふ。そして、この無祀の鬼神を祭る行事は、月の一日から十五日にわたるのである。鬼月とよび、鬼節とよぶのは、その故で、民國となるまでは、歷代を通じて中央地方の官府において十五日に壇を設けて厲鬼を祭つた。同時に、いつのころからか、江南地方では、目蓮寶卷の幾種かが世に

太平公醮

目蓮寶卷

流行するやうになるにつれて、盂蘭盆會もまた最も大衆的なものとなつた。寶卷といふは、もと佛法禮讃から起つたわが國の說經節のたぐひであつたが、次第に戲劇化して、鐘、太鼓、管絃をさへ加ふる一種の餘興となつたもの。驚くべきことには、それらの劇本では、目蓮はすつかり支那出生の人物とされてしまつてゐる。事變前の南京の清涼山は、この山が地藏菩薩の修練所と傳へられるので、一日の地獄門を解放して餓鬼の求食が自由になるといふ日から、燒香禮拜のために山に登るもの道に絕えず、二十五日を過ぐるも蟻の如き人の往來で、各處に茶店や、飲食店が設けらる盛況であつた。安徽の九華山もまた地藏菩薩肉身成佛の處との俗傳あり、同樣の參拜者で山路がうづまる。廣東などでも、この夜は、鬼のために冥衣、冥錢、飯、酒、菜、香燭などを

目蓮の支那人化

門首に供して祭り、祭り畢れば悉くこれを燒き、それを燒幽といひ、最後に銅錢を街上に擲つ俗がある。錢を擲つのは、金聲を藉りて鬼を驅立てる意であるらしい。（十二月の部、信仰生活の項參照）

三、目蓮戲。

目蓮戲は神戲と稱せられて、地方人心の平和をいたさんがためにといはれる。そして演戲の日の內定した數日前から、その地方において屠宰を禁ずるのが例である。しかも、普通の奉納芝居のやうに、毎年隨時にこれを演ずるのではなく、五年もしくは十年に一度で、田舍の人々が最も恐怖する縊死者でも續出した場合は、その兇惡な鬼を鎭めるために、稀れに臨時に開演する

ことがある。臨時でなくば、大抵冬の季が選ばれ、短くは一夜、長きは七夜にわたる。で、行事として季を別てば、冬の部に入るべきであらうが、便宜上、ここに挿入する。假りに三夜の開演とすれば、第一夜に目蓮の父が、財を施し貧者を救ふの場。第二夜に東方亮なる者の妻が縊死する場。第三夜に目蓮の母の劉氏が十殿に遊ぶ場で、この場が劇の眼目である。すなはち溺鬼、縊鬼が、入り替り立ち替りて舞臺に現はれ、どど閻太師の鋼鞭の下に畏伏し、人家を擾亂する罪に問はれ、ことごとく驅逐されてしまうのが幕。閻太師といふは、殷の紂王の臣閻仲であるといふ。

舞臺面

閻太師

目蓮戲の起原については、專門家の攷證にまたねばならない。ただ、この南戲の一と解せられる目蓮戲の普遍は、宋代から發足して、明代に盛んになつたものらしく、幾樣かの戲本がある。安

戲班

徽で行はれるものは、多くの場合、南陵縣の戲子であるが、浙江の紹興、寧波あたりにも、目蓮班と稱する劇團があり、これは專ら目蓮戲ばかりを演ずるさうである。彼等の用ふる脚本と目蓮寶卷との關係その他については省略し、ただ盂蘭盆會に聯關した點だけに止める。胡適の『四十自述』にも、又、魯迅の『吶喊』にも、ほんの數行にすぎないが、魯迅は京劇目蓮救母の舞臺を見るくだり、胡適には幼年時代の想出をかいたくだりがある。

四、演戲愛好

驚くべき熱愛

ここに、目蓮戲について書いたついでを以て、奉納芝居の一項を挿入する。凡そ支那人ほど戲を好む國民とてはないであらう。(酷愛者は自ら迷とよび、狂とよびて平氣でゐる。梅蘭芳フ

アンの如きは自ら梅毒とさへいつてゐる)外國人にして支那事情を筆にしたものなら、きつと支那人のこの習癖に觸れてゐる。それは高粱畑ばかりの滿洲から入關した滿洲人が、漢人のもつ藝術を、戲を漢人以上に愛したらうことも、その盛行を助けた一動力であつたかも知れないが(北京の故宮にも、萬壽山の離宮にも、見事な舞臺がある)さなくとも、支那民衆が戲を以て、その生活上の一要件の如くに見なしてゐたことは、いくらも清以前の文獻に見えてゐる。しかも、歲時記の類を見れば、どの歲時記にも、戲供演劇とか、獻戲進供とか、割牲演劇とかいふ文字が、關帝生日にも、城隍、土地廟の祭日にも、必ずくッつけられてゐるのに氣がつき、そして、その多きことを意外とせざるを得ないだらう。都會地の定設の劇場については言はないとしても、寺廟で、會館

で、公所(コウンスウ)で、つねにどこかで堂客(たんこ)戲(シ)なるものが開かれてゐる(堂客(たんこ)は、もと婦人の意、婦人客を主として觀せたから、この稱がある)會館、公所は外國人がギルドの名で總稱してゐる同業もしくは同郷人のクラブに似た機關で、そこには必ず財神(つアイ)なり、祖神(ツ)なりが祀つてある。そしてその神祭日、もしくは組合員總會の日においては、必ず戲を神に獻じ、彼等もまた神に相伴して樂しむのである。H・B・モースの有名な『支那のギルド』にも、同郷團體と同業組合の二項に、おのおの祭祀について特筆してゐる。が、戲は必ずしも會館(ホイコワヌ)、公所(コウンコウオ)に祀つた神にささげられるばかりでなく、巨商大官が病氣全快といつたやうな自己の慶び事に會した際に、小規模ながら自邸で開くことがあり、友人、知己あるひは同志から廣く醵金せんがために、會館、割烹店、劇場を籍りて開くこと

堂客戲

酬神演戲

がある。時としては加入の團體もしくは會と稱するものから、規約、會則に違犯した懲罰の一として、その費用を課せられることもある。郷村の演劇は、都會のやうに定設の劇場がなく、寺廟(ミヤオ)もそれを開くには小さすぎるから、多くは田間の空地を擇んで、臨時に高臺をしつらへ、半ば素人の小人數の戲班を聘してのことであるが、しかも田舍だけに騷ぎが甚だしく、賭場などが設けられて弊害も亦た從つて生ずる。清朝の名臣で、江寧巡撫であつた湯斌(たンビヌ)(字孔伯、號潛庵、順治の進士、文正と謚す)が、地方無賴の棍徒、新年報賽を借りて名となし、春時にいたるごとに、出頭歛財すとて、江蘇の醵錢による演劇を禁じたのは結局無効ではあつたが、その弊害を痛斥したのである。アーサー・スミスの『支那的性格』の中にも、村芝居に伴ふ迷惑な附隨事項を說いた一項

湯斌の指斥

がある。その一例として現在も行はれてゐる紹興の平安戯なるものを擧げる。

平安戯

平安戯といふは、五六月の悪月、毒月といふ時季に、悪病除けに土地廟でする演戯である。日夜を通じて何日か打ちつづける。晝間のそれは普通の劇であるが、日暮れからのは、多くの役者ども、閻魔やら、小鬼やらに、なるべく女子供をおどすに足るやう扮装して、鑼鼓をたたき、旗幟をおし立てて村中を巡遊する。

召喪

これを召喪といふ。この際、女や子供は、桃の枝、桃の葉を頭に挿して鬼を避けるとて見物する。召喪が畢つてから、彼等は始めて舞臺に上る。演ずるところは、きまつて『目蓮救母』である。そして、舞臺における所作の外に、舞臺の下で、多數の役者が鬼形の扮装で跳ねまはり、驅けまはる。それで一村の悪鬼を逐つ拂

つたことになるのであるが、この演戯の費用も、五月の初めに、各戸から醵出されたもので、好んで出すものばかりでないことはいふまでもない。

八月

一、竈君生日

八月三日は竈神の誕生日。月の一日から三日間、廟を開いて祭事を營むところもある。北京では、厨行すなはち料理人、茶行すなはち茶館從業人が、彼等のために催される寺廟などの竈君會に參拜する。江南においては、炊爨にあづかる女たちが、竈君殿に進香し、家庭においても祭る。竈君素とて精進するものもある。但し一年の本格的祭日はけふであるが、しかし竈神の小祭日は、この月のこの日一度とかぎらない。支那農村の實態を最も科學的に說ける費孝通は、揚子江下流の一村において、三種

竈君會

竈君素

江南農村實例

の曆が行はれ、宗教的分野では主として陰曆。そして、竈神に對しては、おのおの月の一日と十五日に規則的奉仕があり、人々はこれ等の日に墓參し、菜食を遵守すると說き、陰陽曆を對照した詳しい農民曆を作つてゐる。それによると、祭日は年八回を下ることはない。その中でも、この日は、十二月の年末に近い二十三日もしくは二十四日とともに、特に重く視られる一日である。竈神に關しては、項を改めて後に述べる。

小祭八度以上

二、中秋節

八月半

八月十五日。中秋節。又の名八月節。俗に八月半といふ。月を祭る時である。一年三度の商家の決算期にあたり、また、他の二節期と同じく、各家庭とも贈答し、慶祝するので、中產以下は

この日を過すこと樂ではない。その日に先つて、北京では、市中に兎兒爺と月光馬兒とを賣出す。月光馬兒(月亮とも)は木版で刷り彩色せる月宮すなはち廣寒宮の圖である。この圖の中には、上段に太陰星君とか、玉皇大帝とかを畫き、中段に月宮。下段に、兎の人の如くに立ち、杵をもつて舂いてゐる圖(すなはち『北京歳華記』などの書にいへる月宮符像)もある。もしこの金兎の圖を用ゐずば兎兒爺を以て代へる。兎兒爺は黄土に五彩の顔料を施した、兎面人身の置物で、衣冠をつけて立てるがあり、坐せるがあり、あぐらをかいたのがある。『帝京歳時紀勝』は、これを白玉兎とよび、千奇百壯と形容してゐる。南方では、圖も兎も用ゐない。紙製の月宮殿を買つて來る。それすら用ゐないものもある。月への供物としては、月餅を主なるものとして、時

月光馬兒

月宮符像

白玉兎

の花、時の果物を用ゐ、これを卓上に陳設し、月の上るを見て紅蠟燭の偉大なるもの一對と斗に長い線香を立てゝ火を點じ、女たち相集つて拜む。これを斗香を燒くといふ。本來は斗すなはち物を量る器に、高粱米を容れ、その中に線香を立てたもので、鄉村は今もその式をとつてゐるが、近代にいたつては、線香そのもので斗形を作り、中に香屑を納むることになり、無益に錢をいぶす都會人が多くなつた。

斗香

月餅

製法

月餅は中秋を徴象する節物である。わが德川時代の長崎奉行中川忠英の『清俗紀聞』に見えてゐる月餅製法には、麥粉をのべ、内に胡麻、西瓜の種、橄欖仁、青皮を刻み、白砂糖に交ぜて餡とな

し、胡麻油にて揚げるとある。今も素餅と稱するもので、南北の郷村に行はれてゐるのはこれであるが、世は次第に贅澤となつて、羊脂、火腿などのなまくさを加へた葷餅ができ、さらに洋風のクリスマス・ケークなどは、月餅の製法をますます奇巧を極むるにいたらしめ、拜月の節物の意義からはるかに、無用に飛躍させた。そして節日にいたらざる二三十日前から賣出されてゐる。しかし、まだ人と月と雙つながら圓ろやかな意によりてといふ形の圓ろさだけが失はれてゐない。月餅の故事として傳へられるものの一に、元の至元廿六年の夏、八月十五、韃子を殺すとの謠言があつた。と、その夜、果して數省同時に事を起して各縣にあつた蒙古人を一時に殺した。蓋し彼等の暴虐を憤れる漢人が、夜飲の後、酒の勢を驅つて彼等に報いたのである。そし

人月雙圓の意

月餅故事

てこの起事者等は、仲間の牒報交換に、この月餅の贈答を利用したといふのがある。この一事は、少くとも中秋に休暇し、且つ飲讌する習俗が、明初において全國に普遍した旁證ともなると、『歴代社會風俗事物考』に見える。

さて、月を拜して祭を(江南ではこれを齋月宮といふ)畢りたる後に、月光馬兒などを燒きすて、一家の酒盛りを始める。男は月を拜せず、女は竈を祭らずとの諺もあつて、祭事には男は與らぬを例とするが、必ずしも支那全土がさうであるとは限らない。祭竈をも女がするところがある。江南では、走月亮とて女たちは盛粧して、親戚朋友の家を往復する慣らはしであるが、廣東は一層盛んである。十五日の夜は、賞月とて宴し、翌夜は追月とて宴し、あるひは大船を雇うて珠江に浮び、肴饌を陳設して一夜を

齋月宮

走月亮

樹中秋

飲み明すのがある。又、家の屋頂に中秋を樹(豎とも)つると稱して、火燈多數を掲げ、子供も提灯行列などをする。光明を取るの意である。

三、孔子誕辰日——先師誕。

八月二十七日を孔子誕生の記念日とし、先師誕とも稱する。孔子は魯の襄公二十一年十月二十七日を以て生れた。清朝の末、光緒三十二年、上諭を以て從來の中祀より升して大祀に列し、嚴肅に典禮を行ふべきことを命じた。清朝は世祖以來、歷代の君主、一の慣例であるかのやうに、文廟に學者を從祀し、御筆の扁額を贈つたりし、その典禮は、明代に改められたそれによらず、唐代の制を參酌して作つたものによつてゐた。ただ、大祀に升し

清朝祭祀

てから後も、『大清通禮』に規定するところに從ひ、皇帝親ら國子監に詣つて行ふたとしても、闕里においても通禮所制の如くに行ふたかどうかは、多少の疑問がある。あだかも西太后垂簾、光緒帝閉居の年代にあたるからである。清朝亡んで民國が興るまでの二三年間は、帝制の遺物ことごとく廢毀せられて、孔子祭もまた名のみ存するだけであつたが、大總統袁世凱は、民國三年三月の春丁祀孔日から復活せしめ、北京の孔子廟において式典を擧げた。それ以來、歷代の大總統はみな國務總理もしくは總長を特派して祭を致さしめた。國都が南京に移された後も、一時、國祭としての祀孔は廢せられたが、民國二十三年八月二十七日の降誕日を國祭日に指定して、再び全國一齊に式典を擧げた。公羊傳の十一月庚子說を取らず、穀梁傳の襄公二十一年陰

國祭日指定

祀孔禮制

曆八月二十七日説を取り、それを陽曆に振替へて、陽曆八月二十七日に一定したのである。但し釋典といはずして祀といふこと。孔子廟といひて文廟と稱せざること。諱を避けた諸木主を改題すること。禮器の數は大略前清時代の式に則ること。樂章もまた前清時代の式に從ふことの四點は、その以前、民國三年に定められてゐた。國民政府治下における最初のそれは、首都南京では、政府と國民黨との合同で、中央黨部の大禮堂で行ひ、祭壇には孫文遺像の前に、孔子の畫像をさらに掲げ、中央委員および政府各部の官吏數百名が參列し、祭典委員主席汪兆銘が、孔子生誕日を設定した所以を説明した後、孔子の德をたたへた。そして曲阜の本廟へは葉楚傖を特派して、大聖堂における大祭に參列せしめ、この年を初めとして、年々各學校、政府諸機關も休

業することになつた。但し曲阜以外におけるその後の式典は、いづれも極めて簡單なもので、學校などが休む外は、記念のラヂオ放送が行はれるくらゐに過ぎない。

四、地藏王生日

地藏は産の神

七月三十日。地藏王の生日と稱へて、全國いづこにも、盂蘭盆會さながらの盛んな法會が營まれる。紙製の法船を作り、その中に地藏王の外に紙製の閻王像を設けて、時至ればこれを焚化する。又、この日を藉りて、農具と家器との市を立てるところがある。江南には、地藏菩薩は産厄を救ひたまふとの俗信が行はれてゐるため、紅紙で作つた裙(スカート)をつけて進香し、經生産一次なる婦人は、裙を脱すること一次。第二次の分娩に苦患な

地藏燈

からんことを祈念するものがある。寺廟に詣でて燒香せざるものも、家庭において地藏燈といふをともし、香を焚く。また、火をつけた無數の線香を、中庭、門口、路面にさへ挿すものがあり、そこいらの子供等の間にも、磚瓦を積んで塔の形をつくり、琥珀の屑を燒いて戯れたりするので、夜闇の地面が火の子と煙とに蔽はれてゐることがある。琥珀屑を焚くのを、子供たちは失禮にも狗尿香とよび、地に線香を立てるのを燒地香といふ。地藏菩薩は、釋迦既滅以後、彌勒未生以前、自ら六道衆生を濟度せんと誓つて成佛し、身を人天地獄の中に現はして、人間の苦難を救ふのを本願とすると說かれてゐるが、支那における地藏菩薩は、いかにも支那式ないろいろな傳說の類がまつわり、地獄の母を救へる目蓮すなはち地藏となすものがあり、閻羅とするがあり、授兒

狗尿香
燒地香

神とするがあり、いやが上に婦人の迷信を廣くさしてゐる。鄉村の寺廟などでは、この夜を讀經して明かす女たちもある。

狗尿香

狗尿香

狗尿香については、その稱呼がをかしいだけ、いろいろな傳說が伴つてゐる。それは、元末の一梟雄で、一時は高郵に據つて誠王と稱し、その後、吳中に據つて吳王とも稱した張士誠(字は九思)があえなくも明將徐達に擒はれて、終に食はずして舟中に餓死した末路を憫み、吳中の民たち、七月三十日、香を地に挿して彼を記念するのである。これを狗尿香といふのは、九思香の訛れるのだと。一說には、張士誠でなくて陳友諒を弔ふのだともいふ。陳友諒は沔陽の人、同じく元末に兵を起して、江西諸路に覇をと

張士誠記念說

陳友諒記念說

なへ、一時は帝と稱し、國號を漢と名けたが、それも僅かに四年に足らず、最後には明の太祖と戰つて敗れ、流矢に中つて落命した人物である。かの張士誠と彼とは、同じ時代に生れて、同じ下賤な操舟者から身を起し、また同じやうに悲慘な末路をたどつたのであるから、狗尿香傳說は二者混同されてゐるのだらう。が、いづれを眞とすべきかはわからない。

九月

一、斗母生誕

八月晦日から九月九日まで、南北ともに、道教の寺廟では九皇會なる祭事を擧げる。その最終日を斗母誕生日とよぶ。奉納芝居を催すものがあり、(北京の梨園公會でも、この日を祭日としてゐる)神燈を獻ずるものもあり、素食する婦人などもある。斗は斗星の神で、上は九天譜籙を法し、中は鬼神部目を統べ、下は兆民命籍を領むることを司ると宋の張君房の『雲笈七籤』に見えるそれだが、人の病篤き時などに、病人の親屬が、斗に祈りて延命を哀願するところを見れば、民衆の間には、單なる司命の神と

されてゐるらしい。母の字を加へてよぶのは、斗神にも人間の如くに配偶者ありとし、その配偶の女神を意味するのか、どうか。滿洲では素性はわからぬが金霞聖母ともよんでゐる。福州では、斗母は星で、小兒を保護する神だとのみ信ぜられて、七月十一日に、家庭においては饗宴し、斗母宮には子供芝居の催しがあり、參詣者は女の兒を主としてゐる。揚子江上流の村邑などにも、小さな神祠を見かける。斗母禮拜の地域は廣いといつてよからう。

小兒守護神

二、重陽

變遷

九月九日は、重陽とも、重九ともいふ節日。日も月も二つながら陽數の九であるから、その名を嘉し、享宴高會する。唐代までは、中秋よりも重く視られたらしく、饗宴も盛んに行はれ、詩人の歌詠に入ることも多かつたが、宋代に入つてからは、元日、寒食、冬至を最重の三節とし、上元、夏至、中元、下元、臘の次重節にも加へられず、重九には遂に官吏の休暇だに與へられざることになつた。わが國に、支那のこの俗が傳來したのは、淳和天皇の天長元年で、渤海國と我との間に交通があり、支那は唐の穆宗のころ。なほ彼の土に重陽節の盛んな時代であつた。

故事

汝南の桓景、費長房に從つて學ぶ。ある時、桓景に語りて曰く、九月九日、汝が家に災あらん、絳囊をぬひて中に茱萸をもり臂にかけ、山に登つて酒をのめと。桓景、彼の言の如くせしに、九日、その身はつつがなくて、家中の鷄犬牛羊ことごとく死したり。後の世の人、九日にいたるごとに、山に登り、菊酒をのみ、婦人の茱萸

囊を帶びるは、この故となんと、『日本歳時記』にも引ける古傳説は、現に支那においても重陽起原の通説となつてゐる。しかも、蓬餅を食ひ菊酒を飲んで長壽を祈る習慣は、仙人費長房などの後漢時代以前からあつたらしい。

重陽糕・花糕

この日、南北を通じて、重陽糕(北京では花糕とも)を作り、竈神に供へ、祭を畢つて後に食べる。北方に行はれるのは、麥粉の二枚の厚皮の間に棗、松仁、乾葡萄を挾みて蒸したもの。江浙地方に行はれるのは、糯米の粉に白もしくは赤砂糖を加へて、二色乃至五色の糕に(五色糕の名もある)同じく棗、松仁、西瓜子などを表面にちりばめて蒸したもの。そして、南北ともに五色の小さな彩旗を立てて飾りとすることも同じである。ただ、江浙に見る重陽糕は、徑五六寸の小なるものから、大なるは一尺五六寸に及び、

廣東重陽糕

形も方圓にかぎらず、いろいろに技巧が加へられてゐる。廣東の重陽糕にいたりては、月餅にも特に廣東月餅として豪華を極めるのがあるやうに、これにも乾蝦、椎茸、豚肉を加へたのがある。

糕の起原

唐の詩人劉禹錫、九日の詩を作るに糕字を用ゐんと思つたが、五經にこの字がないので已めにしたことが『見聞後錄』に見えてゐ、又『歳時雜記』に、唐代は二社および重陽にみな糕を食つた、そして重陽が最も盛んだつた。棗を以てこれをつくり、あるひは加ふるに栗を以てしたとある。唐に始つたとしても、重陽糕の起原は古いといはねばならぬ。また、近代は食べるばかりでなく、緣起を祝ふにも用ゐられ、九日の早晨、兒女の額に片糕を戴かせ、願くば百事倶に高かれと祝すると、明の謝肇淛の『五雜組』に出てゐる。

登高

登高の俗

高きに登りて酒を汲む慣はしは、今にいづこにも行はれてゐる。城外の塔などある山や、城壁に上り、一日を行樂することは、かへつて昔よりも普遍化してゐるかも知れない。北支那はすでに紅葉のころであるが、中南支那は、紅葉には少し早くして、菊が見ごろ、蟹がたべごろとなり、これまで夜業をやめてゐた舊式の工場も、あすからは夜業開始を例とするので、職工等も今日は大きにはしやぎまはる。又、農村の人々は、一家の無事團欒の間にも、この日の天候に懸念し、晴るれば一冬雨雪無しとて祝ひ合ふ。九月九・蚊蟲叮石臼の諺もある。叮は刺すの意。冷風すでに起りて木の葉の黄ばむを見れば、人も蚊も身に沁むものを

菊花會

辭青

感ずるのである。都會人には郊外の寺廟などを借入れて菊花會を催し、あるひは公園などに菊花觀賞會を開くものもある。これを北では辭青などと稱する。豐凶一に天候による無産農民と彼等の生活と、蓋し同日の談ではないのである。

三、霜降日

霜降日は九月の半ごろにあたる。北支那においては、この日必ず氷を見るといはれてゐる。中南支那においては、第二の農繁期の最中で、まだ氷凌を見るほどの寒さではない。また、別に民間の行事とてもない。ただ、新栗を枕邊において食ひ、食へば力が出るなどの言ひ傳へがある。公けの行事としては、清朝時代、天明に軍神を祭り、火鎗を放つて分列式めいたものがあつた。

信爆
軍神祭

その發火の禮を信爆（爆に同じ）といつた。また、この期に先つていろいろな實用に遠い舊式軍器と旗、指物を携帶した兵隊が、練兵場に設けられた旗纛廟といふまで、ものものしい市中行進などをするので、その見物人で道筋は一時雜沓した。それを纛旗

看纛旗

を看るといつた。新春を開兵の時とし、この日を收兵の時とする意に出たのだといふ。

十月

一、十月節—寒衣節

祀厲壇

送寒衣

十月一日は、十月節、十月朝、燒衣節などの名がある。清明、中元と同じく、祖先の墓を祭り、寒衣を送る日で、官民にとりて重大な一日である。清朝時代は、天子親しく宗廟を祭り、また時憲書すなはち曆書を頒つた。地方官府でも、無祀の厲壇を祭つた。滿洲國も舊慣に從つて鬼節としてゐる。けれども、民間でこの日を重く視るのは、無論、そのためではなく、嚴寒將に至らんとするので、祖考に衣を送つて本を忘れざるための日である。また、中南支那の最廣範圍の地方においては、このころ、すでに收穫を

了へ、小作人は年貢を地主に納める時(地主からいへば收租完糧の時)であるから、あらゆる田家は、新穀を祖霊に供へ、(安徽のある地方では、八月の初旬に新米飯を炊いで供へる。これを獻新(シエヌシヌ)といふ)將來における一家の幸福と繁昌とを祈願する日であるからでもある。『支那の農民生活』の中の支那人の『家』なる觀念を說いた項に、子孫の連續は卽ち火と香との連續である。生きてゐる子孫の、その祖先の霊に對する考へ方は、民衆の間に明かに組織的には述べられてゐない。けれども、その霊はわれわれと極めて親しい世界に住んでゐ、經濟的には、その子孫が、定期的に、紙の錢、紙の夜服や、紙で作つた品物を、燒いて行ふところの寄進方法の上に、その一部分が依存してゐるといふのが一般見解であると、費孝通(フエイシヤオトウン)教授が書いてゐるのは、實にこの寒衣節(ハヌイチエ)にも當

るのである。寒衣は五色の紙を剪んで、男女の衣をつくり、長さ尺にも滿たない玩具とも見えるもの。古い北京歲時記などにいつてゐるやうな、五色彩帛を以て冠帶衣履を作成したものは、市上には滅多にない。それと紙錢(チちエヌ)の類を墓前において、もしくは家庭において、夕方、禮拜の後に焚く。これを送寒衣(ソウンハヌイ)とはいふのである。

二、醃菜(イエヌつアイ)釀酒(ニヤンちウ)

北方では霜降日(シオワンチヤンリ)を過ぎて後、蘿蔔(ルオポ)、箭幹(チエヌカヌ)、白菘菜(パイソウンつアイ)などの野菜を醃藏する。江南の諸地はやや後れて、小雪すなはち十月中旬のころ、野菜ばかりでなく、獸魚の肉類をも加工して貯藏し、酒をも釀造する。蘇州についていへば、極貧の家でないかぎりは、各

戸とも菘菜の心を去りたるを鹽藏する。普通鹽菜といふのはこの菘菜と解してよい。菜心を細く刻み、それに鹽と酒とを加へて、冬を越さす方法をとるもある。これを春不老といふ(菜の名ではない、春まで持越し得る鹽菜の意)また、中産以上の家では、豚、鷄、鴨、魚の肉を醃藏する。牛肉を燻製とするもある。これは新年用とせんがためで年肴とよぶ。農家で十月に造る酒を總じて十月白とよび、白麵で麴を作り、泉水を用ゐて米を浸して作るからとて三白酒といふ名がある。未熟の間に飲む酒に生泔。酒といふもある(泔は米汁の意)その外にも、草藥を加へて釀す農家手造りの酒に、秋露白、杜茅柴、靠壁青、竹葉青など名けるのがある。また、糯米を燒いて炒米をつくり、冬に備へたりなぞする。以上、いづれも、宋の王逢(字は會之、當塗の人)が詩の句に、妻孥

防歳饉甕盎隆冬儲とある冬儲にあたるもの。

三、國慶日—雙十節

國慶日。雙十節とも。陽暦十月十日である。中華民國紀元前一年、すなはち清の宣統三年八月十九日、湖北の武昌に事を起し、民國二年十月十日に正式政府を樹立した記念日である。この日は、全國の官衙、公共機關、學校等みな式典を擧げ、旗を掲げて休業する。南京に統一新政府樹立後も、開國記念日として慶祝することに變りはない。

十一月

一、冬至

冬至は十月の中ごろに來る。漢代の令節の一に冬至の名も見えてゐるが、その歳首とともに並び稱せられるほどに重く視られるやうになつたのは、六朝あたりからで、しかも南方人の間に始つたのらしい。隋の顏之推の時俗の謬りを辨正した『顏氏家訓』に、孤にして長至の節にあへば、父無ければ母を拜し、母無ければ父を拜せよといひ、又、南人、冬至、歳首に喪家に詣らずと訓へてゐる。長至はすなはち冬至。（宋には一に冬住の名もある）父を拜し母を拜するのも亦た節を拜するのである。喪家に

長至・冬住

詣らずといふは節を賀せざるの謂ひである。宋の神宗の元豐時代の典制に關する見聞をしるした龐元英の『文昌雜錄』にも、祠部の休暇は、年に七十六日。元日、寒食、冬至の三節は最重で、おのおの七日を與へられたとある。その後の歷代、冬至を重要視することに變りなく、清朝時代においては、天子南郊に大祀し、その翌日には、大官等、表を上つて慶賀したものである。又、仕宦庶人を問はず、節を拜するために往來した。それ等の官家の典禮は、民國に入つてから漸く廢れ、袁世凱の大總統たりし時までは、郊祭を祀天と改め、行事をも辛ふじて續けたが、それも近年はどこかへ消え去つた。今は、ただ、冬節の名が殘つてゐるばかり。しかし、民間においては依然として舊慣が維持されてゐ、冬至の大なること年の如しとの諺があり、亞歳とも古めかしくいつて

祀天

亞歳

る。

北方では、羹飯の外に細肉の餡の餃子などを供へて祖先を祭り、諺に冬至は餛飩・夏至は麪といふ通り、この日は必ず餛飩を食べる。また、今ごろは、さやうな風流人もなくなつたらうが、梅の一枝に八十一箇の花を畫き、一日に一花づつを彩色して行き、九九八十一で春となる消寒圖といふを掛け、その圖傍には、試看圖中梅黑黑・自然門外草青青の一聯を並べて掛けたものだ。南方でも拜節の大體は同じである。冬至の前夜を冬至夜、當日の朝を冬至朝、午を過ぎれば冬至日とよび、一度ならず祖先を祭り、且つ家内酒食をとる。ただ、中産以上の舊家などでは、糖、肉、果、豆を材料とする冬至糰なるものの外に、かずかずの贅澤な馳走を作つて食べ、節酒を飲む。上海に近い崑山あたりでは、安樂菜と

消寒圖

冬至糰

安樂菜

て作るのは、菜、芋、栗をつかつただけであるが、その外に豐かに酒菜を用ふる。また、戚友のために宴會をも開く。有者冬至夜・無者凍一夜との諺はそれをいふのである。江南の冬至は、この地方において最も寒いころにあたる。それに正月も近づくころとて、貸してくれる人も、冬至となれば貸してくれない。貧乏人にとつては一番困る時である。

九裏天

冬至夜・凍一夜・凍殺快とは、松江の童謡であるが、實際、凍死人を出すこともある。北京にも、江南にも、冬至を起點として九九八十一まで數へる。九裏天とも、連冬起九ともいふ俚謡がある。一九二九・相逢不出手・三九二七・籬頭吹鼻栗とかぞへて

九裏天

五九四十五・窮漢街頭舞・不要舞・不要舞・還有春寒四十五といふのから、九九八十一・窮漢受罪畢となつてゐる。幸に凍死を免れ得たとするも、貧乏人は寒さにふるへ上つて、街頭を舞ふが如くにして往來する時である。北京の九裏天は窮漢街頭舞の頭が前になつてゐ、その前の一句が、三九四九・氷上走となつてゐ、句の數も少く、江南のものほどに口語詩としての面白味がない。

鬼崇俗信

凍死人があるためばかりでもあるまいが、江南では、鬼ありて祟りをなすとの俗信があり、冬至を上元と同じく鬼節とし、たそがれるころ、屋角の路面に、酒飯をすてておいて、紙錢を焚いたりする家もある。蘇州では、この年に死せる幼兒は、冬至まで棺に納めたままでおき、この日、屍骨と棺材とを焚化する慣ひである。杭州では、祭祖の供物が豐富で、一家の食卓もまた奢つてゐる。

冬至肉

その際、豚肉の醬油のつけ焼きを食ふことになつてゐて、これを冬至肉といふ。又、祭後に長幼の序によつて互に禮拜する。尊長に對して、鞋と襪とを贈物とする女もある。これは古への履長の意だといはれる。すなはち隋の杜臺卿の『玉燭寶典』に見える冬至の日の履長の賀なるもので、長壽を祝するのである。

富家巨室は、この日を以て衣更への時とする。中南支那の割合に暖かな地方でも、十月には袷をぬいで珠皮か、銀鼠を着、十一月には灰鼠を、十二月には羔皮、灘皮、狐嵌の類を着るのが慣はしである。周の文王は青鳳の毛で裘をつくつたとも、漢の武帝は西域の吉衣裘を服したとも傳ふるばかりではなく、論語の鄉黨篇にも、緇衣には羔裘・素衣には麑裘・黃衣には狐裘・褻裘は長うして・右の袂を短くすとのたまふてゐる。舊慣尊重の人にと

服裘

りては、必ずしも贅澤の沙汰とばかりはいはれないのである。

二、救恤

前清時代には、冬の三ヶ月にわたりて、特に上諭を發して施粥廠を開き、饑餓と寒氣とに脅かされてゐる極貧者へ、一杓の粥を與へ、棲流所において、流民を收め、爐火を給し、棉衣を施した。その外にも、行路病死者のために棺材を施すやうな救恤事業が行はれた。それは單に名ばかりの、効果に乏しいものではあつたが、なほ無きには勝つた。今もそれは繼續されてゐ、寺、善堂で、煖廠・粥廠と、粥廠とを建てて、貧民を賑恤してゐる。江浙地方においては、三ヶ月にわたるは少い。まづ冬至から歳末までに限りて、各善堂もしくは寺觀において、困苦無告の人に善を施す。これを

棉衣會

善士

俗に做好事といふ。あるひは一定期間の好事を做すために、資を集めて棉衣會を組織し、棉襖を施すのもあり、鄉村では蓆を織つて秧薦馬と名くる雨雪を蔽ひ得るだけの半外套を乞食などにわかつもある。上海あたりの大都會においても、善士とよばれる樂善好施の人には、この期間、進んで錢米を寺廟、善堂に喜捨をもし、また自ら供養のために、功德のために粥もしくは棉衣をわかつものがある。

三、冬春米

冬至の前後から、江南の米産地では、各農家とも、一年の糧にあつるだけを精白して倉に藏める。この行事を冬春米といふ。清朝時代には、十月に官倉を開いて漕糧米を納め、地主も小作人

から租糧を收め、自作農、小作人は、この月の一日、祖先の靈位に新穀をささげる慣はしであつた。民國に入つてから、內亂その他の影響で、農村の疲弊は免れないが、刈入れ、脫穀、貯藏は日を期してなされざるを得ぬので、大農は大農ほどに忙しく、且つ天候による米價市場の變動を氣にもする。十七日を彌陀佛生日といふのは、他の神佛の生日のやうに、信心から出た生日の意ではなく、風が彌陀の面を吹けば、又、風が彌陀の背を吹けばと、東南風と西北風との風による米價の觀測を、勿體なくも彌陀佛生日の名に藉りたてまつつただけである。大地主が餘剩米を利用して、自家用酒の十月白を釀造するばかりでなく、副業として小規模の釀造業を營むことなどは、揚子江本流沿ひの小都市では、近年やや下火の傾きであるらしい。新詩人劉半農の『一個小農家的暮』といふのに、彼は十年の烟斗を含んで、慢慢として田裏より回り來る。屋角裏に鋤頭を掛けてから、しばらく稻牀の上に坐して、人なつつこい狗をかからかつてみる。それから狗と一しよに小屋にいつて、牛をちよつと看てから、うしろを振り向いて、嬶よ、どうだナ、俺らの新釀の酒は、といふのがあるが、これは小農の實生活にうとい詩人の空想が半分以上である。

彌陀佛生日

劉半農の新詩

四、佃戶納租

地主への年貢米は、冬至を以て期限とし、冬至前の三十日を、十日づつに分つて一限とする規定で、初めの十日を頭限、中の十日を二限、後の十日を三限とよぶ。一限に納米ができれば、小作人は最も便宜を得るが、二限となればいくらかの損がゆき、三限

の冬至の日のぎりぎり滿限となれば、割增をとられねばならない。で、百姓たちは冬至前には一生懸命の働きだ。彼等が仕事に逐はれることを、俗語で趕限頭といふ。安徽省で最も廣く行はれてゐる農歌に、

趕限頭
安徽農歌

田主派人來追穀・沒得穀時要折錢・折了八成還嫌少・要折猪鷄湊十斤といふがある。また、田主老爺對人講・不計豐荒租要收・若是佃戶完不足・一定捉猪共牽牛といふがある。

臘日

十二月

一、臘八

臘八は十二月初八日である。臘日といへば、もとは冬至の後の第三の戌の日で、この日に百神を祭つたと、說文には釋かれてゐる。臘は獵で、獵して獸をとり、それを祖先に供へて祭つたのであるともいひ、原始的な意義と、行事とについては、多少の異說もある。臈とも書いたものがある。けれども、近代に於ける臘八は十二月八日なることに疑義はなく、佛家が釋尊成道の日となすそれである。すなはち、釋迦、雪山で難行苦行を重ね、この曉、鷄の鳴く音を聽き、初めて悟を啓きたまふと言ひ傳へた日であ

佛粥

製法

る。されば、この日を記念するため、宋の東京の諸大寺が、七寶五味粥を作つて送つたのが、いはゆる臘八粥であると、明の陳文耀の『天中記』に見えてゐ、陸放翁にも、今朝佛粥更らに相餽る・反つて覺う江村の節物の新たなることをとの句がある。佛粥は、百果粥とともに、今は異稱となつてゐる。わが國の禪寺において、臘八接心の後に食べる五味粥、温糟粥といふのとは、製法の上で全然違つてゐる。わが國のそれは、昆布、串柿、大豆、粉藥などを合して製すとあるが、支那のそれは、今日、普通に天津、北京で行はれるものでも、黄米、白米、小米、糯米、小豆、菉豆、棗、栗、桃に白砂糖を加へてゐる。『燕京歳時記』などに記されたものは、これ等の材料だけに止まらず、瓜子、落花生、榛子、松子、葡萄などを加へてある。贅澤には限りがないのであらう。いづれにしても品數は少くな

いが、都市においては、前日あたり、米莊の店頭には適宜に調合したものを賣つてゐ、又門口にふれ賣りにも來るから、これを調へることは手數を要しない。ただ、女の家族の多い富裕な家などでは、前夜から多人數で、皮をむきとり、煮汁を捨てるなどの用意に長時間を要し、しかも、豆などは一粒ごとに阿彌陀佛と唱へねば功德にならないなどといふから、大變な騒ぎとなる。そして、いよいよ釜の下に火を入れて硬い飯とまでに炊ぎあげるには、又、隨分、長い時間がかかる。でき上つたら、これを祖先の靈前に供へ、親戚知友にも、なるべく午前中に餽り、自家でも食べる。もつとも、施捨結緣の意で、緣だ、緣だと叫んで通行人に强うるが如く頂かせるのは、鹽煮した豆だけであつたり、善堂もしくは寺でする施しは、名稱そのままの水ッぽい粥で、啜ることはできるが

食ひはされぬといふもある。善士善女の名だけを欲して、心にもない慈悲の形式だけをとるからである。前清の末に北支那にゐて、親しく多くの人と事物とに接觸して、多くの著書を遺しもしたアーサー・スミスは、支那人のいはゆる善行なるものが、全く形式に墮し、自己滿足を求むるだけなのを慨き、『支那的性格』の中に同じ精神は、『臘八粥』と稱する奇態な慈悲心の迸りで示されてゐる。十二月八日には、かねて奇特な料見はもつてゐるが、まだその慈悲心を滿足させる機會のなかつた人が、最も安上りな粗末な粥を、來る人ごとに寛大に接待する慣はしがある。これを布施と名けて、功德を積む一方便と彼等は考へてゐる。田舍に住む極貧者でも、豐年なら、もう少しうまいものを自宅で食へるだらうと思ふほどのものを、それでも、接待する側は、自家

スミスの皮肉

の意志を廣告したものとして得意だと書いてゐる。

臘八醋

南人用ゐず

二、臘八醋

この日、北方の人には、臘八醋とて蒜を錯に漬けて、これを密封し、除夕にいたりて食ふ慣はしがある。讓廉の『春明歲時瑣記』には、青翠愛すべく醋味甚だ美なりと書いてゐる。山東人あたりから擴がつた俗であらう。中南支那の人は、ひとり臘八醋とかぎらず、概して大蒜の臭氣を嫌がつて用ゐない。江南の農村で、もし用ふることがあれば、夏の烈日の下に照らされて疲勞した後に半顆をとるくらゐである。ただ、人を葬る脚班とよぶ土工等は、夏になれば、大蒜を醋にし、もしくは燒いて、毎日のやうに食ふさうである。端午の日に門口に大蒜をかけて、これを蒜錐

除鬼防祟の意

とよび、除鬼防祟の効ありとするのは、また一のまじないに過ぎないが、浴尸盛殮者がこれを用ふるのと、何等かの關はりをもつてゐるかも知れない。

三、祭竈

十二月二十三日、もしくは二十四日。上は時めく要人の厨房から、下はその日の糧に逐はるる苦力等のあんぺら小家にいたるまで、凡そ物を煮炊きする竈が備へられてゐるところなら、必ず竈神を送る祭を致す。支那人にとりて竈神ほど畏敬さるる神はなく、竈神祭ほど廣く上下階級を通じて行はるる行事とてはない。周禮五祀の一であつたといふから、三千年來の悠久な行事でもあるのであらう。が、今日の祭竈はその原意は全く失

小過年

はれてゐる。この日の別名を小過年とも小年下といふのは、年越し前の年越しの意で、重要歳末行事の一たることを語るものである。祭るのを送竈祭灶祭竈などといふ。江浙地方では、

念四夜

二十四夜を單に念四夜といひ、祭りを送竈界といふ。二十を念といふのは、昔、吳王の女に二十といふ名の人ありしを憚りてといふが、これは疑はしい。

竈神

竈神本體

竈神については諸説一致してゐない。祝融であるといひ、黄帝竈を作り、死する後、竈神となつたといひ、神姓蘇、名吉利、夫人の姓王、名搏頭といひ、神名隗、その狀、美女の如しといひ、姓張、名單、字子郭、夫人の字は卿忌、六女あり、皆な察治と名くとあり、又竈神壤